

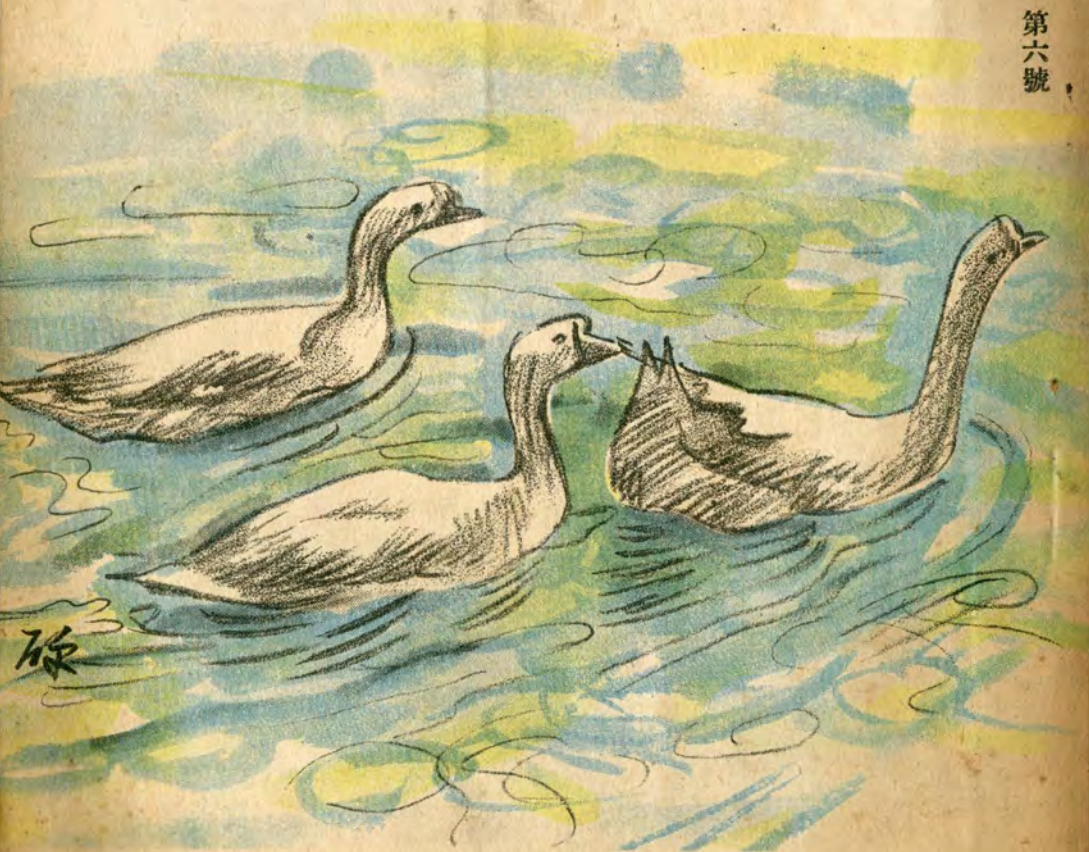
土

淨

號 月 六

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可 (毎月一回) 日發行
昭和十八年五月廿日印刷本・昭和十八年六月一日發行

第九卷 第六號



知恩院門跡
淳土宗管長
法増上寺主

郁芳隨圓序・増谷文雄著
大島徹水

行 誠 上 人

B 6 版二三〇頁 定價一圓五十錢 送料十二錢

學識に德行に一世に秀でた上人の全傳成る！上人の言説行業はそのまゝ信仰の深底にして讀者を感化せずんばおかぬ。

稀代の善知識に私淑せられよ

中村 辨 康 著

日 常 勤 行 式 講 讀

B 6 版二四〇頁 定價一圓五十錢 送料十二錢

毎日お勤めをするお經文の一端を懇切に解説し一讀して信仰の何たるかを解せしむる絶好の信仰の入門書！

會員各位必携の修養好伴侶

文學博士 山本幹夫著 (A 5 型一六二頁クロース装)

法然佛教とわが國體思想

定價二圓二十錢 送料十五錢

神國日本の教法たる法然佛教を歴史的に解明した時局下必讀の書

中里 介山 著 (三六版二五〇頁クロース装)

法 然 上 人 傳

定價六十錢 送料八錢

文豪の手になる「勅修御傳」の通俗化、上人傳の權威の普及である

佐藤春夫・吉田絃二郎・岡本かの子・倉田百三・郁芳隨圓著 (四六版三二頁)

我 が 信 仰

定價六錢 送料四錢

文壇の巨星が念佛の眞骨頂を隨筆風に語る布教用書に最適のもの

法然上人鑽仰會編 (菊版二一〇頁)

念 佛 讀 本

定價二十錢 送料八錢

權威新進十七師が筆を揃へて念佛信仰の各要目をそれ／＼闡明す

發行所 法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七番

かなしきかな
なや 善心は
としんくにし
たがひてうす
くなり 惡心
は日べにした
がひていよい
よまざる。さ
れば古人のい
へる事あり。
煩惱は身にそ
へる影 さら
むとすれども
さらす。菩提
は水にうかべ
る月 とらむ
とすれどもと
られずと。



淨土 六月號 目次

表紙・目次カット……………牧野 醇

小さな信仰の哲學……………佐藤 春夫 (二)
聖典 大楠公の忠誠……………大野 法道 (三)
講義

房州の旅……………吉田 絃二郎 (八)

西峽廬構へざる構へ……………佐藤 賢順 (一六)
雄記
ピルマの話……………北林 透馬 (四)

雑記 覚え帖……………子母澤 寛 (一六)

法語 感話 お浄土の座席とお土産……………伊藤 宏天 (二五)

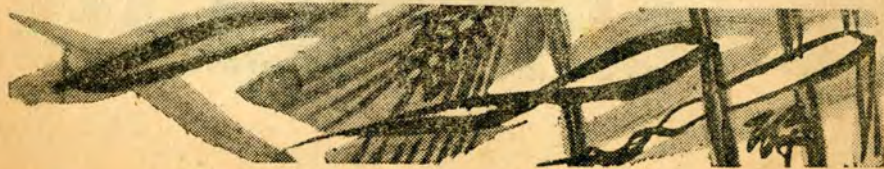
吳 鳳をたづねて……………魚尾 晃久 (三)
信 仰 相 談……………岩野 喜久代選 (一五)
壇……………太田 耳動子選 (一五)

浄土界隈 景……………漫 畫 協 團 (一五)

先覺者の悲願……………(一六)

法語 解説 好めば自ら發心す……………中村 辨康 (一七)

編輯 後記……………(一八)



小さな信仰の哲學

佐藤 春夫

この間某大學で哲學を修めてゐるといふ二人の青年の來訪を受けて人生や藝術宗教などを語り合つてゐるうち、宿生、わが身のさまざまな前生や今生、來生などの事に及ぶと、青年の一人は、「さういふ事を信じなければ宗教に入れないものでせうか。わたしにはそんな事はとても考へられませんが」といふ。そこで自分

「前生、今生、來生などを思ふから宗教を信するのではなく、逆に佛教を信する結果が、前生や來生を感じさせるのでせう。いや、自己の運命の悲痛を切實に感ずる場合前生の因縁といふ風なものを感じる氣持は、古來の佛教精神で今日の日本人の血のなかへ入つて格別信仰といふほどのものを抱かない人々にも感ぜられるのではないだらうか。感ずるのである、考へるのではない。平安朝時代の人々は戀愛といふものはみな前生の約束事と思つてゐたらしい。それで『君とわれいかなることを語りけむむかしの世こそ知らまほしけれ』などと歌つてゐる。これ等も考へたらうへでこれを知つたのではなく、ただ感じただけの事であつたらう。」

「考へたのでは駄目ですか」

「さう人間の智慧はまだそれほど發達したものとも思へない。複雑な大きな問題になると人智では考へ及ばない領域がまだまだあるぶんたくさん残されてゐるのではないでせうか。前生や來生があるこ



との證明も出来ないかも知れないが、それが無いといふ證明も多分何人にも出来ない。それならばそれを感ずる人の感じを否定してしまふ理由だつて成り立たないわけです。」

「それはさうですけれど、やつぱり感じられないのです。」

「感じられないものは致し方ないが、君はその鈍感のために大きな損失をしてゐるわけです。信仰の問題でも同じことですけれど、僕はそれ等の事を感じたり信じたりする事のために人生が生きやすいのです。有るか無いかも知りたいものをも有りと假定して人生に處することが人生にとつて楽しく都合だとすれば、この假定に立脚し、更にこの假定を事實と見なしこれを信じて（だつてこれが全く無いといふ證明も成立しがたいのだから、信じたい意嚮さへあれば信ずることも出来るわけである）これによつて人生に處することは迷信などといふべきではなく人間の智慧、上分別といふものであらうと思ふ。人間は人間の生活を快適なものにするためにいろんな方法を講じてゐる。現代人が拜跪してやまぬ文明の利器と稱するものはすべてこれである。物質のさういふ工夫はよろこんで承認する人々が、精神生活のうへで智慧を働かせて誠實で快適な生活の方法たる信仰の生涯に入る心がけを一片の迷信、幼稚な不合理のやうに考へるのこそ僕には不可解です。」

この管見に對して二青年の意見を聞いた上でさらに何か言はなければなるまいと思つてゐるところへ別の來客があつてこの話題はそれきりになつて別の客の俗談に代つてしまつた。

後になつて自分で考へなほしてみると、自分の信仰論のなかには一種の功利主義哲學めいた淺薄がまぬがれないらしい。高遠な佛敎學者をひんしゆくさせるに違ひないが、さう不合理な言ひ分とも思へないし、自分の淺はかな信仰を述べたものと見てもらつてよからう。ただ信仰はたとひ淺はかなものでこの合理性の外に必ず熱情を伴つてゐる筈のものであらう。またこの熱情に導かれることで淺薄な合理主義も高遠なところまで進んで行けるのである。





ビルマの話 はなし

(二)

陸軍報道班員

北 林 透 馬

タイ國からビルマへ進攻した日本軍は、戦

闘の上では餘り大したことはなかつた、と言

つて好いだらう。前にも書いた通りビルマ防

衛の英印軍は、日本軍が海の方から來るとば

かり思つてゐて、陸の方のことはまるつきり

忘れてしまひ、泰緬國境にはトーチカ一つ構

築して無かつたからである。が併し、その代

り、道の險しさは、下手なトーチカ以上であ

つた、とも言へる。

僕は一月六日にバンコックを出て、國境方

面にむかつた。これは、ダボイ攻略にむかつ

た部隊を追つて行つたのである。

ダボイは、ビルマのテナセリム地區の、モ
ールメンに次ぐ重要地點であり、そのダボイ
にむかつて日本軍隊は、ピサンロークから突
入して行つたのである。

バンコックから汽車に乗つたのが十三時。

十三時と言へば午後一時だが、約二時間の時

差があるから實際は十一時であり、これから

暑くならうと言ふ時刻である。この頃の氣候

は、後で聞けばタイとビルマでは一年中で一

番好い氣候だつたのである。つまり十二月か

ら一月二月が、空氣も乾燥し、温度も涼し

く、こんな好い季節は無いと言はれてゐるの

である。が、それにしても日中の暑い時は矢

張り三十三度位にはなる、と言ふんだから、

これでは日本の、夏のうちでも一番暑い時と

同じである。ビルマで、たいへんお涼しうご
ざいます、と言ふのが、日本ではたいへんお
暑うございます、と言ふ位にあたるのだから
大変なわけである。

汽車に乗込む、と言つても、特急富士の展

望車を想像して貰つては困る。では三等車ぐ

らひか、と聞かれても、ちよつと返答に困

る。三等車と言つても、内地の、殊に東海道

線あたりの三等車は、タイやビルマの一等車

にも相當するだらう。二等車と言つても腰掛

けは板であり、日本のどんな田舎へ行つても

見られないやうな狭苦しい小さな客車である

ましてや戦争とあつては、二等車は愚か、

三等車にもん氣におさまつてはゐるられな

寫眞は筆者

い。僕等はすべて貨物列車に乗込むのである。貨車にアンペラを敷いて、その上にあぐらをかいて旅行するのは、狭い板の腰かけに、窮屈に腰をかけてゐるよりは、ずつと楽だ、と言へないこともないのだが、さて困るのは窓の無いことである。

鐵で出来た貨車は、それ自身一個のトランクみたいなもので、中央に荷物を上げ下げする口が開いてゐる以外は、嚴重な鐵板で張りまわされてある。風は極めて通り難い。而も周囲の鐵板が、三十三度の温度に熱せられ、いや太陽の直射日光を浴びる鐵板は、實際は手も觸れられないほどに熱せられてきてゐるから、鐵板の内側は三十三度ぐらひではきかないであらう。

貨車に乗込むと、もうそれだけで、汗はじりじり滲んできて、シャツもズボンも、ぐつしより雨にでも違つたやうに濡れてしまふ。持參の飯盒を開いて晝飯にしようとしたが、とても食欲など起つて来ないのである。貨車は荷物と人間だけで無く、馬も運ぶか

ら、車内には何となく動物の臭ひがしみついてゐる。言はゞその小便臭ひ惡臭が鼻について、とても物など食ふ氣にはなれない。話をする氣にもなれない。僕等はシャツもズボンも脱いでしまひ、殆んど裸になつたまゝで、たと眼をつぶつて、うんうん言つてゐるだけなのである。

汽車が走り出すと、それでも幾らか風が入り、多少はしのぎ好くなるとは言ふものゝ誰しも彼も眼をつぶつたまゝで、口をきく者も無いのである。汽車が止ると、タイの女や子供たちが、ザボンやバナナを賣りに来るが、ザボンだけが救ひの神様である。

おいザボン、ザボン、と呼んで、此時ばかりはみんな生き返つたやうにザボンにとびつく。

ザボン一個、小さいので十サタン、大きいので二十サタン。十サタンは十五錢ほどにあたるから、値段とすれば高くはないが、言つてそんなに安いとも言へない。賣りにくるのは子供よりも大人の女が多

く、その女たちがみんな帽子をかぶつてゐる。帽子と言ふのは、西洋風の麥ワラ帽子、ボンネットである。それで日本のアツパツパと言ふ簡單服に似たものを着て、太い棒の前後にザルをつり下げ、ザボンとバナナを載せ、そして足は裸足なのである。

ザボンのことをタイ語では何とか別の名があつたのだが、ザボンと言つても通じる。賣れるのはザボンばかりで、いつかうにバナナが賣れないのは矢張り空氣の乾燥した暑さのなかでは、バナナはまるで菓子やうにねつとりしており、とても喉の渴をいやすわけにはゆかないのであり、バナナを喰べると、なほさら喉が渴いてくるからであらう。

はさら喉が渴いてくるからであらう。バンコンに着いたのが十七時。太陽が大部分西のはうに傾いてゐた。

小さな街だが、驛の前に喫茶店のやうなものがあり、ザボンと西瓜を賣つてゐた。

「西瓜があるぞ」

と喜んで飛びついたが、どうも西瓜が甘すぎて、いつかうに美味く無い。日本で喰べた

ら、こんなのは本場の大和西瓜と言ふところ
で大いに持てはやされるんだらうが、此處で
は、とても駄目だ。こんな點を考へてみる
と、此處で非常に美味いと言つて僕らの喰べ
てゐるザボンには、日本へ持つて行つたら、或
ひはとても酸ッばくつて口に入らないかも知
れないと思ふ。

さう言へば僕なども、何時の間にか、ひど
く辛いもの、酸ッばいものばかりを喰べるや
うになつてゐたことに氣が附く。唐辛子を、
焼いて、すりつぶしたチリーパウダーで汁が
赤くなつてゐるやうな、肉のカレー煮みたい
なものを、平氣で美味しがつて喰べるやうに
なつてゐるのである。考へてみると、日本の
内地の食物は、ひどくあまいものばかりのや
うに思へるが、あまいものゝ事など思ひ出し
ても、餘り食慾は起つて來ないのである。

その喫茶店には、オレンジ・クラッシュユが
あり、實に美味かつた。オレンジの果物汁に
タンサンが入つてゐるのだから、まあソーダ
水みたいなものだけれど、果物汁がほんもの

で、新鮮なオレンジをそのまゝ押しつぶした
奴だから、實に美味い。これも頗がしまつて
くるやうに酸ッばいのである。

驛前で少し休んで、トラックに乗る。パン
コンからカンチャナブリまでは、好い舗装道
路があり、トラックで全速力で飛ばすと、僅
か一時間足らずである。

汽車から降りたわけでも、ほつと救はれた
氣持であつたが、木蔭でひと休みして、オレ
ンヂ・クラッシュユですつかり元氣が付き、今
度はトラックで、全速力で飛ばしたんだか
ら、その愉快なこと、何と言ひ現しやうもな
いほどである。

陽はもう椰子の木蔭に半分ぐらひ姿をかく
し、急に温度の下つた風が、まつこうから吹
きつけてくる。シャツの汗など、たちまち乾
いてしまひ、頭は洗はれたやうに、クリーヤ
に冴へてくる。路傍に立つて、何となく僕等
を見送つてゐる子供や大人たちに、此方から
手を振つて、チャイヨオと呼びかけてやる。

カンチャナブリに着いた時は、もうすつか

り陽が落ちて、あたりはうす暗くなつてゐた
が、此處には先發した第一線部隊も暫く設營
してゐたので、僕たちはその、兵舎に使用さ
れてゐた、街の中央の木造建物に入つた。

カンチャナブリは、メクロン河に添つた小
都會だが、この河を越すと、その向うにはも
ろ路もなく國境までは言はゞ全くのジャング
ル續きなのである。其處で僕等は、そのジャ
ングル地帯を突き抜けて行く爲に必要な、諸
般の準備を、この街で整へてゆかなければな
らないのである。

その晩はぐつすり眠り、翌日早朝から目を
醒し街を歩いてみると、色々なものを賣つて
ゐる。丁度昔の街道筋の驛場のやうに、街道
に添つて兩側に、物を賣る店がならんでゐる
のだが、その長さが五六町もあるだらうか。
五六町で店が盡きてしまふと、もうそれで街
は終りであり、ひと通りならんでゐる店の裏
側は、もう田圃であつて家はないのである。
店は雜貨類、食料品類を賣るものが多い
が、その他に反物呉服を賣るもの、銀細工を

やつてゐるものなどもあり、この街がこの附近の村落の商業の中心をなしてゐることが解る。

街の中央あたりに喫茶店のやうなものがあつた。好い珈琲の香りがするので、入つた。

珈琲は、ビール・コップほどのものに一杯六サタン。丁度十銭である。

身體に布を巻きつけ、裸足で歩いてゐるタイ人にとつて、この値段は決して安いものとは思はれないが、店はいつばいの繁昌であり、椅子は満員の盛況である。

珈琲は實に美味かつたが、見るとヒルス・ブラザースの赤カン入りの珈琲を使つてゐるのでありミルクはミルクメイドブランドのコンデンスを使つてゐる。これではなるほど一杯十銭は當然であり、むしろ大勉強とも言へるほどだが、こんな所まで結局アメリカやイギリスに儲けられ、僅かばかりの購買力を搾り取られてゐるのだとすると、全く氣の毒のやうな、馬鹿々々しい感じである。

いや、このコンデンス・ミルクだけではな

い。雜貨屋の店をのぞくと、コールゲートの石鹼や化粧品があり、オドールの齒磨きがあり、藥屋の店にはアメリカ製品、イギリス製品にまぢつて、なんとバイエルのアダリンまでなべてあつたのには、驚くと言ふよりも呆れてしまつたのである。

アダリンは高級睡眠劑である。睡眠劑などと言ふものは、神經衰弱が何にかゝつて、不眠症になつた者が用ひるので、言はゞ最も近代的な文化人——と言ふのも全く滑稽な話だが——の必需品である。この、あまり清潔でない布を巻きつけ、口を何やら眞赤に染めて、裸足で歩きまはり、勝手に路傍にしゃがみ込んで、指で飯を喰つてゐる原住民が、アダリンを飲まなければ、夜眠れないとも言ふのであらうか？

相手には必要が有らうが無からうが、製造したものはどしどし押しつけ、無理にでも買はさうと言ふのが、所謂イギリス式、アメリカ式のコンマーシャルイズムと言ふものゝ實體なのであらう。(つづく)

「淨土」購讀その他のお願ひ

◇前金切の御通知は從來その月の發送後に行つてをりましたが、今後は二月月早くつまり七月に切れる方へは五月中に御通知致しますから 折返し御納入下さるやう。

また退會なさる方はその時に折返しその旨御通知下さるやうに願ひます。從來は會の性質上前金切れでもお送りしてゐた場合も御座いますが 今後前金切れとなつた時發送を自然停止するやうに致し度いと目下整理に努力してをります。

◇新入會の方は御送金の際に「新入會」なることを繼續の方は「繼續」なることを御明示願ひます。また毎月殘部がありませんから 御申込の月にその月の「淨土」が送れないことが御座います。

◇まとめて御申込の方はあらかじめ前月中に御申込置きを願ひます。それでもあまり多部數では御申込に應じかねることがあります。



房 州 の 旅

吉 田 絃 二 郎

房州富浦の和田正系博士に招かれ、鑑仰會道瀬君の東道にて兩國驛を立つ。高架線の上から眺めらるゝ本所あたりはわたくしにとつて忘れがたい地であるので、窓を開いて、あれかこれかとあたりを見廻してゐた。大正十二年の大震災以前の過去のことであれば、今は何一つ残つてはゐない。緑町の割下水あたりと、鑑系堀の水だけが、それとらなづかれる。あのころの町が焼け失せたばかりでなく、あのころの人もほとんど今は世になき人となつてしまつた。獨り生き残つて、誰れ彼れと今は世になき人の面影を偲ばなければならぬ自分自身をかへりみては、寂然たる氣にもなる。

あの震災のさなかに幾萬の死を見せつけられた人々は恐らく無常の一念に發起し、歸依信從の一路を辿るでもあらうと想像してゐたが、果して心を空しうして生

きんことに精進しつゝある人は幾人あるであらう。またとなき機縁をめぐまれつゝも、朝夕に妄念の房となつて世を過ぐす。人間といふもののあさましさを、高いところからじつと眺めては慈眼をうるほしておゐての方があらうであらう。

芭蕉翁は天和二年十二月の大火に芭蕉庵を焼き、身をもつて免れ、こゝに於て無所住の心を發し、たとある。時に三十九歳であつた。芭蕉は尊い機縁に生きた人である。驚くべきことに驚き、悲しむべきことに悲しみ、喜ぶべきことに喜ぶのが子供の心であり、誠の人の心であり、聖人の心である。

花の散るを見て無常迅速の理を悟らず、鳥の聲を聴いて大歡喜を感じない人は、すでに提婆の徒に墮したのである。



汽車は幕張、稻毛のあたりを走つてゐた。そこにも三十年前の思ひ出がある。唯一人の友と信じてゐた友人が千葉の郊外で、腹を切つて死んだ時、わたくしは稻毛の松山の徑を歩いてゐた。二三日前かが泊つたといふ旅館の庭には紫陽花が咲いてゐた。わたくしはそのをりのことを想ひながら海をながめてゐた。なほ獨り生きてゐる自分をかへり見ては、遠い旅をつゞけてゐるやうな氣もするのであつた。

富浦に下りた時は日も落ちかゝつてゐた。和田博士に誘はれて、夕暮れの館山灣を見た。館山の山も海も松原も小川もわたくしにとつては忘れがたきものである。こゝにもたゞ獨り生きて、昔ながらの山河に對するの悲しみを胸に秘めつゝ黄昏の徑を歩いた。

薄紫の可憐な草花を松原の雑草の間に見出したので、わたくしは草の名を和田博士に問ふた。

濱大根といふ名であつた。

たそがれの薄暗こめて咲く花の

名をきくだにもあはれなりけり

そこは博士のお住まいから、濱の海濱學校に通ふ路の傍の草村で、夕暮の濱風は寒く旅人の腸に沁むの思ひもした。

夜の更くるまでわたくしたちは語り合つた。和田博士の念持佛も拜ませていたゞいた。白椿が供へられてあるのも尊かつた。佐藤賢順師の御開眼と聞くと懐かしかつた。

菩薩おはす部屋のかほりや白椿

枕に通ふ松風の聲も、波の音もいつの間にか絶えてしまつた。

旅の心は牙えに牙え、澄みに澄む。一身を虚無に托

安西覺 承著

新刊 法然上人の和歌

四六版六十二頁 定價五十錢 送料四錢
天成の歌人宗祖の和歌を懇切に解説した名著

發行所 法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七番



して、思ふことなく、わづらふことなく、死生亦念と
するところなくんば、何處か精舎ならざる所あらん。
況して博士夫妻の誠心を盡されてのこまやかなるい
たはり、旅のうれしさに咽ぶ。

瑠璃鳥の聲に眼覺む。博士に誘はれて庭に出れば、

白椿、八重椿さかりに咲く、

濱に出て、海濱學校を訪れ兒童たちへ短い講話を試
む。遠くは樺太、臺灣あたりからまでも集ふ人たちの
由、父母を戀ひしと思ふこともあらう。

すくすくと育てよ濱の母子草

父も母も汝をわすれず濱大根

母をおもふ夕べにはさけ濱大根

母をおもふゆめにも似たり濱大根

父母の許を遠く去つて住む子等のおもかけを胸にき
ざみて那古の觀音に向ふ。

那古の御堂をめぐりて花のさかりである。

多寶塔も昔のまゝである。鳩の群れ飛ぶ姿も昔のま
まである。佇立して思ふことふかし。

形影相伴ふの日も今は夢なりけるを歎く人もあるべ
し。

還り來たつて山に呼べど、海に訴ふれど、山海さな
がらにして、たゞ白雲の依々たるのみ。

浦島がなげきや那古の花のかけ

安房高等女學校にて講演、校寮にて山海の珍味を盡
してのもてなしにあづかる。

廣い校庭、高い青空、豁然たる風光に擁かれつゝ、

伸びゆく若人たちの幸福を思ふ。若き人々の魂は尊

く、若き人々の夢は美し。

くさくさの美しきゆめ霞みけり

外房州は初めての旅であつた。しかしその濱の名
もわたくしにとつては親しいものであり、忘れがたき
ものであつた。

碧空青山、黝岩に激する浪、山に沿うて咲きほこる
草花を眺めてゐると、遠い旅をつゞけてゐるやうな氣



さへするのであつた。

穂麥や菜の花の間に濱の人たちが集まつて、防空の演習をしてゐるのを見ると尊く思はれて、喉の裏がほてるやうな感じもするのであつた。

今は文字通りに日本中の人々がたゞ一つの心になつて國を思ひ、國難を憂ひつゝある。その麗はしい人々の心を描きながら、青空を眺め、山を、町を、海を見わたせば、日本の自然の美しさが一層犇々と胸に迫つて來るのであつた。

今日五月三日庭の石楠花咲き、畑の牡丹咲き、軒近き樺にはじめて尾長鳥來る。季節はいよいよ夏に入るし。旅を思ふ心切なり。

家に在りて窓前の新緑に對す、そこに旅あり。

細雨の庭に面して孤座す、そこに旅あり。

夜半夢さめて相思ふ、そこに旅あり。

わが心を一轉すれば居る所悉く旅あり。

居る所悉く精舎なり。

到る所菩薩おはしません。

陸海軍病院慰問「淨土」

寄附者芳名（敬稱略）

一圓二十錢	大牟田市曙町一七	井村正喜
二圓	青森縣五所川原町川端十	顯昌寺
三圓	長野縣下伊那郡龍丘村駄科	
五圓	能代市長根町	念通寺
一圓五十錢	宇治山田市欣淨寺	西福寺
十五圓	大連市臥龍臺一一四	表島誠諦
十圓	大阪市古市町白鳥園	水谷一雄
一圓五十錢	名古屋市外守山町小幡	熊又ミドリ
三圓五十錢	東京市世田谷區烏山町	兒玉諦圓
五圓	大阪府泉北郡高石町六〇五	松永賢順
五圓	佐賀縣東松浦郡入野村	若林與惣吉
三十圓	北海道北見國紋別町顯正寺	瀧川才哲
七圓	新京市祝町二丁目	石上皆應
一圓五十錢	和歌山縣田邊市元町淨恩寺	田中卓二
十圓	日本橋區濱町二ノ一	岸信宏
十五圓	佐世保市元町十一	萩原秀子
一圓五十錢	姫路市坂田町	眞野秀種
三圓	熊本市本居町五五二	顯入寺
一圓五十錢	神戸市神戶區中山手七ノ一	高貝イワエ
		豐永志津子

聖典
講義

大楠公の忠誠

(歎佛偈講義：一三・一)

大野 法 道

國は泥洹の如くにして等雙なからん

之は第十六偈の前半である。阿彌陀佛の世界は第一の淨土であるとの信念を説く經文を、五つに分けて見ることにしたが、その第一の人と國が一體であることは前月號に濟んで、之はその第二である。

「泥洹」とは涅槃のことである。ねはんと言へば、二月十五日のお釋迦様の「ねはん會」を思ひ出し、佛の入滅即ち亡くなったことのやうに見えるが、實はねはんといふのは、釋尊が成佛の時に得られたさとりの世界のことである。我が儘な貪り、瞋り、癡などの、あらゆる煩惱の炎を消しとめて、本當に正しく生きてゆく道に、完全に立たれたのが涅槃である。

阿含經といふ古い經文に涅槃のことを説いた言葉に、

我が生は已に盡き

梵行は已に立ち

作すところは已に辨じ
後有を受けず。

といふのがある。この言葉の中心は、第二句の「梵行は已に立ち」である。正しく生きる清淨無垢の生活が「梵行」で、それに完全に立つことができるやうになつたのが佛である。

正しく生きるといふのは、どこまでも生きて行く道を得ることであつて、中途でいやになつて止めたり、行き詰つて進めないやうなのは本物ではない。

どこまでも生きてゆく道を得ると、自分のすることに自信があり、心の底から之でよいといふ聲が出る。かうした自信ある生活で、どこまでも行くのが、その次の「作すと

ころは「已に辨じ」である。そこには最早や、すべての汚れは跡を絶つてゐるから、「我が生は已に盡き」であり、迷ひよろめく人生は無くなつてゐるから、「後有を受けず」である。

つまり、人生の最も尊い眞の姿で以て、どこまでも進んでゆくのが涅槃の世界である。

二

「國は泥洹の如くにして」とあるのは、淨土は涅槃の世界だといふのである。佛徳によつて成就されて生きてゐる國だといふことである。

淨土が生きてゐるとは、それからそれと、人々が信仰ある生活によつて、その世界に生れてゆく事實のあること、淨土が佛によつて成就されてゐることでもある。

今のわが身が佛を信じて淨土に生れゆく心を持つことも、佛が淨土を成就したまふ前提であるに相違ない。

このやうに、淨土は、人間から離れた、たゞ佛だけのものではなく、今の我々に連がりがある。

「等雙なからん」とは、雙ぶものはないといふことで、人間が本當に生きた眞の姿を顯はすほど、尊いものは無いのであつて、その世界を、宗教に於て淨土といふのであるか

ら、雙ぶものはないこととなる。

本當に生きるこの上もなき尊い姿を、われ／＼は最近に發表された「兩提督の最期」に見た。

昭和十七年六月のことである。東太平洋に於て、敵の空母、甲級巡洋艦各一隻を撃沈、他の空母一隻を大破、飛行機百數十を撃墜した戦鬪に於て、帝國軍艦のひと／＼も洋心に神鎮りし、司令官山口中將、艦長加來少將の最期である。

敵弾の命中を受け、艦員必死の努力の限りを盡くしたが、艦は遂に約十九度までも傾斜してゆく。御眞影は奉還された。共に艦に止まりたいと申し出る艦員全部を、驅逐艦に乗り移らせ、司令官と艦長とたゞ二人、淡々たる月を賞しつゝありと見るや、轟然たる大音響ともにも、一切は太平洋の奥ふかく、中天には一痕の月が、たゞ寂しく光つてゐる。

驅逐艦に移つた艦員は、兩提督を見守つて、訣別の合圖を交はしつゝある時、傷ける艦の艦橋に見える二つの影は、神かの如き崇高さを顯はしたと、發表の言葉に記されてゐる。

まこと兩提督の最期こそは、眞に生きぬく最も尊い姿で

あり、淡々と賞せし月の如くに清淨であり、雙ぶものなき
けだかさである。

三

之でよいといふ心の底からの聲で、どこまでも生きてゆく
涅槃の世界について、思ひ起すのは大楠公の忠誠である
時は延元元年の五月二十五日、楠正成、同正季は、決
死の七百餘騎を以て、逆賊の足利尊氏、同直義の率ゐる、
五十餘萬の大軍と湊川に戦ひ、奮戦力闘の限りを盡くし、
まさに直義を討ち取らんとしたが、衆寡敵せず、刀折れ矢
盡きて、餘勢の七十三騎を集め、二列に居並んで、同音に
念佛を十遍ばかり唱へて、一所に腹を切らうとしたのであ
る。

その時、正成は弟の正季に向ひ、今の願ひは何かと訊
ねたところ、七生まで同じ人間に生れて朝敵を滅ぼしたい
念願あるのみと聞き、世にも嬉しげなる様子にて、

罪業ふかき悪念なれども、我れもかやうに思ふなり。い
ざ生を替へて、この本懐を達せん。

と契つて、兄弟互ひに刺しちがへて、同じ枕に伏したの
であつた。

いはゆる「七生報國」の大精神に生きぬくのであり、大

君に盡しまつる忠誠の至純なるものである。

ところが、この至純の忠誠について、或る論者が次のや
うに言つてゐるのがある。大楠公は、平生から佛教を信じ
てゐたのであるが、佛教では佛を人間以上の尊いものとし
てゐるにかゝはらず、正成は勤皇のために生き、戦ひ、死
する人間の生を、佛に優る尊いものと確信したのである。
といふのである。

これは大楠公を見誤つてはゐないだらうか。

大楠公は決して人間の生を佛の上に置いたのではなく、
たゞ勤皇の一心に、どこまでも生きぬくこと、すべては之
でよいのだといふ確信があつただけである。優るとか劣る
とかいふ、甲乙の二心から選び出した一心でなく、全身全
霊を大君にさへげ盡した、至純の一心であり、忠誠であつ
たのだ。

さればこそ、「七生報國」の語は、いつまでも日本精神を
湛へて、萬世に傳へられてゆくのである。

佛教が指す尊いものは、眞に正しくどこまでも、生きて
ゆく涅槃の世界、淨土である。

平生から信ずる信仰と、違つた心の持主として、大忠臣
を見るやうな言論は、深く誠め且つ慎まねばならない。

歌壇

岩野喜久代選



小樽市 中村 もん

戦へるみ國にありて野も山もさく
 評 嘆きみつこのしづけさや
 評 こんなに激しい世紀の大みい
 さに國をあけて闘つてゐるとい
 ふのに、どうでせう。この野山
 の春のうるはしきは。ちんまん
 と櫻が四方に咲きみちて、そし
 て、しづかに平和に、愛する國
 土の美を人々に十分に味ははせ
 てくれて居ります。なんと有が
 たいこととせう。

栃木縣 大輪 益啓

わが家のうからとなりて生れこし
 馬の子祝ひ母炊ぎます
 評 小馬が生れました、家族の一
 員として。母はよるこんで、お
 祝ひの御馳走を作つて下さいま
 す、親しくもほほえましい農村
 のなつかしい情緒です。

兵庫縣 前川 泰象

後かげ見ゆる限りを送る眼にかへ
 り見給ふ母は小さし
 評 戦に傷いて療養所に起臥して
 ゐる身を母上ははる／＼とたづ
 ねて下さいました。別れを告げ

て歸る母上の後姿を見えなくな

るまで私は見送つて居りました
 母上は時々ふりかへつて慈愛に
 みちたまなざしで、もうおやす
 みと云ふやうに見かります。
 その母上のお姿の小さいこと。
 御苦勞が多いのでせうか。

兵庫縣 矢場佐太郎

大君の股肱と呼ばれ純忠のころ
 火と燃えふつつ沸る
 岩手縣 中村 てつ

初蛙なく音しづかに春を告ぐ雪解

冷たき夜の水仙に
 名古屋市 鷺津 玉相

休日にかへれば母も耕しにゆき給

ひしか家閉してあり
 鹿児島 松田 英子

王臣にあらざるはなし山深み賤が

家に立つ出征の旗
 兵庫縣 前川 泰象

軍神のみ魂とあふく若櫻短き春を

咲き盛るかな
 東京市 武田 清子

近々に第一線に飛ぶ父はみ暮をが

むと花切りて居ぬ
 愛知療養所 戸松勝美

裏庭の蕾を持てる沈丁花いねつつ

見ゆる場所に移しぬ
 東京市 小柳 萬
 生き死は語らざりけり一筋に敵撃
 減と征きしつはもの
 東京市 丸山勘四郎
 奉公袋整理し終へて腕くめば彼方
 に櫻咲き初める見ゆ
 大阪 森本 清浩
 晴れたるあけ方の空ゆるがして
 一機朝日に向ひつつ飛ぶ
 北海道 花田 順往
 田に畑に鎌をふるふもこの御代を
 支へんとする銃後の戦士
 兵庫縣 水谷 良子
 春の雨いつ止みにけむ小夜ふけて
 おぼろ月夜の外の明るさ
 大阪 小林 順道
 たはむれに空に向ひて霧ふけばま
 ろくか／＼れり七色の虹
 朝鮮 萩野伊佐子
 人の世の生死を誰か知りぬべき今
 日のひと日を悔なく過せ
 兵庫縣 三谷 秀次
 つつ暮す傷兵われは
 高原の療養所に馴れて今は唯だ謝し

群馬縣 松本 時雨

貧農の老びとなれど誠をば獻金に

こむありがたきかな

三重縣 青木 桂山

一億のまことをうけて大空のまも

りかためぬうちて止まむ

京都市 福島孝次郎

わがくには七つの洋にひろがりぬ

いざ起ち上れ國の若人

東京市 清水 富

日の本に生れし幸をみならはや

すけく難をまつる今宵を

大分縣 西川 善彌

白雪の中にみどりす麥の芽に強き

試験の嵐いどめる

名古屋市 山田 順證

澄む面にほろ／＼とちる山ざくら

散りし護國の人を思はず

投稿規定

はがきに一回二首以内

とし一淨土一編輯部歌

壇係あて住所氏名明記

の上送ること

篤志寄附者芳名

金二圓也

大阪府中河内郡八尾町

松 桂 寺殿

金十圓也

東京市牛込區袋町光照寺

糸山 天眞殿



雜事覺え帖

子母澤 寛

むかし、五繩張、三脇差といふ事がある。
渡世人つまりやくざが、よく神武以來といふ
けれども、神武以來はとにかくとして、仲間
の間に所謂繩張りといふ、いはゞ勢力範圍
を、云はず語らずの間に定めて、互に侵して
はならぬ侵されてはならぬとなつてゐるもの
が五つある。第一が香具師、第二がばくち打
ち、第三が葛西の肥汲み、これは兩國を外へ
渡つた葛西一帯、この肥汲みが江戸八百八
町を繩張りにしてゐた。千住でも品川でも、
江戸街内の肥を汲みなければ、一應葛西の睦
へ渡りをつけて、それでは何處から何處まで
と限界を定めて貰つて、その土地だけは汲む
事が出来るといふ事になつてゐたものである

第四が、四十八組の江戸町火消、これがち
やんと繩張が極まつてゐてなか／＼うるさい
ものであつた。第五さし賣、大名屋敷の大部
屋の折助などが、暇をぬすんで拵へる穴開き
錢を通す藥、正月あゝのさしを持つて、近所の
大店や何にかに出かけて行つて、「へえお目出
度う存じます」とか何んとか云つて顔を出し
てこれを手土産にして、いくらにかなるので
ある。若しこの時に御祝儀を出さなければ飛
んだ悪戯をしたり喧嘩を賣つたりするので、
みんな包んでくれた。これにちやんと繩張が
あつた。ばくち打ち、繩張の事を死守とい
ふ、命がけで守るといふ意味。
序だから誌して置くが、芝居や映畫へ出る

やくざ者は下馬といふものを着る、着るといふよりは付けるのだが、袴の下へ重ねた單衣のものゝ事である。この間、森律子さんから、よく下馬といふ事をきくが、あれは何んですかといふ事をきかれた。すぐにお答はしたが、あれは、やくざが、いざ喧嘩だなんぞといふ時に、すぐに、ばつと上の袴をぬいで、身輕るな單衣一枚になつて働らく、その用意のためにいつも重ねてゐるものだときかされては居たが、改めて尋ねられると氣になるので、こつちもまた改めてその道の親分へきいて見た。その人の云ふには、何かに昔のやくざ者なんぞは決してあんな粹なものではなかつた。あれは芝居の方が捨てた仕事で、下馬といふのも芝居の方の言葉でやくざには無いものだといふ。そうかも知れない、私の知つてゐる老やくざで、明治初年の荒い時分の第一番の願ひは、ふところへ十圓紙幣を入れて、天ぷら蕎麥を喰つて見たいといふ事であつたといふから、凡その生活もわかるといふ

ものである。

*

三脇差、つまり長脇差をさして歩く渡世は三つあつた。一が香具師、二にばくち打ち、第一が床屋だ。床屋はむかし武士が扶持に離れて多くこれで世すぎをした。時世時節で今はこんな哀れな生活をしてゐるが、いざ事ある場合には、いつでも舊主の御馬前で討死をする覺悟だといふ事を現して、公然長脇差をさして歩るものだといふ。その外に、床屋は、火事の際は町奉行所へかけつけて、危険の場合は、書類箱を背負ひ出す事を命じられて、その鑑札を渡されてあつたものである。

よく昔のばくち打ちを映画などでやる時に、いろ／＼な刺青などをやるが、これは間違つてゐる。ばくち打ちは餘り刺青はしなかつた。あれは蓋とか鴛かき、がえんの類がやつたもので、ばくち打ちは疵があるとか、無いとかいつて、眞白い無垢の肌を自慢にした

刺青をするには夏はいけない、冬の寒い最中の朝の中と定まつてゐた。一彫といつて一日の分量は通常の間で五寸四方、意氣地のないものは二寸四方位で音を上げるといふ。さきに下繪を書いておいて、それを見乍ら彫るのがこの繪に禁じものが二つあつた。一つは「文覺」一つが「景清」どつちもこれを彫れば直ぐに死ぬと云はれてゐたもの。が、私の知つた老人で、わざと人にさからつてこの「景清」を彫つて、死ぬか死ぬかと心配させたが七十八迄生きた人がある。

*

一口に切腹といふが、これには、實にいろ／＼な遺方があつた。先づ、公然切腹を仰せつけられる場合、それから内々の沙汰があつて切腹する場合。

仰せつけによる切腹は、大體、何處の藩でも同じやうな方式であつた。切腹の座へその人が座ると、前に短刀を載せた三寶が出る、本人がこれ手をかけるとか、或は短刀を手

に取上げるとかした瞬間、うしろに控へてゐる介錯人がすぐに首を打落す、本人が自分の腹へ短刀を突當てるといふやうな事は餘り無かつたやうだ。従つて段々その短刀を白扇にして、この白扇を取上げる途端にさつと首を切るといふので、これを扇腹などといふに至つた。

御維新の時、黒田藩の勤皇家加藤司書の切腹は、扇ではなく木刀を奉書へ包んだものを用ひた。お寺の本堂の前庭に、堀建仔屋を造り、屋根は苔でふき四方は白い幕を張つて、中に疊二枚を敷き、周囲には四個の燭臺を据へ、疊の中央には、死衣を置き、その前に白木三寶があつた。冬の夜中である。

司書は麻上下で、死衣の上に胡坐ぐみで座つた。やがて肩衣を脱し、一旦三寶の上の木刀をとつて押いたゞき、またこれを返した上で、介錯人へ「わたしは宜しい時は宜しいといふ」といつてから、二君がため盡す赤心今よりは、尚いやまさる武士の一念」と聲高く辭

世の歌を吟じ、やゝ落着いて、うーんと一聲、丹田へ力をこめた後で「よろし」と聲をかけて首を茲へさし延べた。

介錯人が刀を下ろす。司書は白足袋の兩足を前方にのぼし體は仰向けに後方に倒れると同時に、身體の何處からか、うーんといふ氣息が發した。これは腹中に含蓄した氣息が外に發したものである。三十六歳であつた。

*

出羽天童藩の勤皇家吉田大八の切腹も、小さなお寺の本堂であつたが、本堂といふよりは庵寺といふ方がよく僅か十疊位より敷かれ、東と南の二方が障子であつた。これは眞夏の、しかも眞晝、やかましい位に蟬が鳴いてゐる。先づ二方の障子を開け、眞ん中に、蒲團二枚を重ね、それを白布で掩つて、親類のもの二人が介錯人として、ここへ入り、大八は三寶の上の短刀をとつてからふと思ひついて、辭世を書きたいからと、用意を頼み「われのみは涼ときくや蟬の聲」と書

いた。

勤皇家大八をこんな事にした莊内藩から檢死役人が二人來て、障子の外へ床几を据へて腰を下ろしてゐたが、いざといふ時になつて、遠慮をしてその障子を閉めさせた。大八は、この日、朝風呂をわかつて入り、その座へ來る迄、庫裡で、いつもと同じように笑ひ乍ら、お別れに來たいろ／＼な友人達と冗談を云つてここへ入つて來たのだ。

障子をしめると、突然、わつはつはつはつと大聲で笑つた。そしてやがて、うーんといふ唸り聲がして、介錯人は「御檢分を」と外へ叫んだ。檢死人は、さつと障子を開けたが、すぐにまたぱつと閉めて「しかと見届けました」といつた。大八は白装束で腑伏になつてゐた。介錯人の手は借りなかつた。

後で、さつきの笑ひ聲は何んであつたかといふ話が出た。大八は、もう腹を切る直前に、大米屋のそれがしといふ馴染の藝者へ、宜しくといふのを忘れて死ぬところだつたと

先覺者の悲願

近代日本建設の第一歩を明治御維新とすることは誰も知つてゐるが、當時の人々が何の位外敵に對し悲痛な考へを持つてゐたかは餘り判らぬ者があるやうである。明治初年頃の歐洲列國は競つて東亞侵略の魔手をのばしてゐた。

冗談をいつたのだとわかつた。三十五歳である。二人ともに、勤皇家の魁であつた。もう半年もそのまゝでゐてくれたら、恐らくは明治維新の元勳として、飛ぶ鳥を落とす勢の人になつたであらうに。

*

長州藩の人物、家老長井雅樂の切腹は、家老の國司信濃以下何十人といふものが出張して、なか／＼大さわぎの中に、自邸でやつた水色がかつた白装束で同じ袴をつけ白羽二重

の大座布團の上へ座つた。切腹は覺悟がしてあつたので、福原又四郎といふ縁邊の若者を頼んで介錯人と定めてあつた。この福原がうしろへ立つ、前には白木の三寶へ短刀がのせてある。その先きには國司信濃以下ずらりと並んでゐるといふ譯で、雅樂は短刀をとつて押しいたゞくと、朗々とした聲で、謠曲「弓八幡」を誦つた、その聲が屋外に迄も聞こえたといふ。

やがて、靜かに腹をくつろげると、すうー

つと、一文字に切つた、少し深くやつたと見えて、血が袴の上へ流れ出て來たが、雅樂は、悠々として、今度は短刀を逆手に持ち直して、咽喉へ當て、ぱつと倒れたまゝ顔を持上げて、國司信濃以下の檢死の顔をいつ迄もちつと睨み詰めてゐる。本人はそのまゝ死ぬつもりであつたらしいが、なか／＼呼吸が止まらない。檢死人は、眼を介錯の福原の方へやつたが、福原は、雅樂を見詰めて動かない。それには理由があつた。

東亞はまさに白人のためす斷され搾取されようとし、國家の危機がひしひしと迫つてゐた。當時の先覺者福澤諭吉は自分の一命をかけたも、せめてわが子だけでも外國人の奴隸にさせたくないと思つた。この熱烈な指導者たちの悲願があつたればこそ今日の日本、東亞のわれ／＼があつたことを忘れてはならぬ。即ち

福澤翁の自傳に次のやうな一句が記されてゐる。
「實に情ない事であるが、いよいよ外人が手を出して跋扈亂暴と云ふときには、自分は何とかして其禍を避けるとするも、行き先きの永い子供は可愛さうだ。一命に掛けても外國人の奴隸にはしたくない。或ひは耶蘇宗の坊主にして政事人事の外に獨立させては如

何。自力自食して他人の厄介にならず其身は宗教の坊主と云へば、自から辱しめを免があることもあらんかと、自分に宗教の信心はなくして、子を思ふの心より坊主にしようなどと種々無量に考へたことがあるが、三十年の今日より回想すれば恍として夢の如し。唯今日は世運の文明開化を有難く拜するばかりです。」(村瀬秀雄)



西峽廬
雜記

構へざる構へ

佐藤賢順

二回に涉つてめんだうな講義を續けたので、今度は暫く休息するつもりで、萌え出でる新緑の下を散歩しながら、氣晴りにならぬやうな軽い話をしよう。小説なら挿繪といふところであるが講義にはそれが無い。が、さし當りそんな役目をする話である。

第一話 昔、勝軒といふ劍士があつた。熱心な武藝の修行者で、諸國を遍歴して名のある範師の門はあらかた敲いて、教を乞ひ技を磨いて、腕にかけてはどうやら自信もついたが、まだ何處かに物足らぬ所があるやうな不安な氣もして、いよいよその道に精魂を打ち込むのであつた。

一頃、勝軒の家の臺所では、鼠の横行が激しくなつて、戸棚は穴を開けられる、米櫃は囓られる、溝から溝を傳つて上つてきて柱に登り、鴨居を渡るので、柱も壁も所嫌はず梅の花のやうな泥の足跡で穢く汚されてしまつた。勝軒の家では豫てから猫を飼つてゐて、か

やうな折に備へてあつたが、これが一向に役に立たない。この猫とても決して鼠を取るのが下手だといふわけではないので、前には幾度か殊勳を立てたことがあつた。或る夜などは、ぐつすりと眠つてゐる勝軒の枕元へ、大きな鼠の領首をあぐりと銜へたままやつてきて、片方の前足で勝軒の顔をこすつて、「どうです、この腕前は：」と言はぬばかりに、しきりに起したこともあつた。所が今度の鼠が出るやうになると、全く自信がないもののやうに、てんで臺所へ近づかなくなつてしまつたのである。

そこで主人は、隣り近所の家々の定評のある名猫を代る借りてきては、夜になると臺所へ放つのであるが、どの猫もどの猫も鼠の反撃に遭ふと不覺にも退散してしまふ。

どうした事だらう、と勝軒は焦慮した。一通り近所の名だたる猫を使ひ盡したので、もう策の施しやうがなかつた。鼠の狂暴は募る一方で、近頃では白晝あたりに人なきが如く、座敷まで侵入してく

ることも珍らしくないやうになつた。

と、或る日、鼠捕にかけては天下無双だといふ老猫をつれてきてくれた人があつた。夜になつて鼠の音が激しく聞えてくるのを待つて、勝軒は老猫を臺所へ放つた。老猫は鼠があることなど全く意識しないものの如く、居眠りから起きて庭の飛石でも歩くときのやうに、悠つくりと臺所へ這入つていつた。すると今まで激しく籠の前の板の間を飛び廻つてゐた鼠は、ビタリと釘づけにされたやうに、動けなくなつて立竦んでしまつた。老猫は初めて鼠のゐるのに氣が着いたらしく、その方へ向つたが、少しも足並を亂されることもなく、その鼠の前に近寄ると、皿の上の魚の切身を銜へる時のやうな氣易さで、鼠の首を軽く銜へると、靜かな足取りで臺所を出てきた。障子の紙の破れ目から、首尾や如何にと臺所の状況を覗いてゐた勝軒は、うむと感嘆の呻きを發して、はたと膝を打つた。

その夜、あたりが寢鎮まつてから、ふと勝軒が眼を覺すと、臺所が何となく騒がしい。また鼠かと耳を立てて聽いてみると、今夜のは鼠の音ではなくて猫の聲である。何匹かの猫が臺所へ集つて、先刻の殊勳の老猫を中心に座談會を開いてゐる。その中には勿論、當家の未熟な愛猫もある。老鼠の反撃に遭つて一たまりもなく退散した白、斑、三毛、虎など皆集つて、老猫を中にして圓座を描いてゐる様子である。

『今度の失敗で私はつくづく思ひました、技巧だけでは駄目だと：

。』と語つてゐるのは、白の聲である。『私は技巧、技巧とそればかりを目當てにして、技を磨いてきました。一撃の下に相手を倒すのは如何にも氣持ちが好い。端で見てゐる人にもさそ氣持ちがよからうと、そんなつまらぬことを氣を使つて、派出な仕合ひばかり憶はれてきました。が、いざといふと技巧だけではどれほど無力であるかといふことを、今度ははつきりと教へられました。』と述懐した。

老猫がそれを受けて言葉添へた『技巧といふものは、文學でも美術でも武道でも同じことだが、勞力の經濟の爲に生れたもので、最初或る一つの技巧を發見した宗匠は、自分の精神的な深さを表現するの如何なる方法を選んだら最善であるかと苦心した擧句に漸くそこまで到達したのだ。だがその宗匠は同じ精神的な深さを表すのには、二度目からは、大した苦心もなく一度發見したその最善の方法を用ひればよいのである。四條派では山の景色はかう書くとか水はかう描くとかいふ技巧は、かうして出來たのであるから、それはそれを工夫し案出した人にだけは意味がある。師匠相傳の傳統的な手法として傳へられる技巧は、さういふわけで、勞力經濟としては意味があるが、それを發見した人以外には、精神のない形骸、もぬけの殻に過ぎない。そんなものは藥道でも武道でもない。精神のない技巧派は駄目だといふことに早く氣が着いたのはよかつた。』次に語り出したのは斑であつた。『俺は威嚇主義で行かうとしました。向ひ合つたらまづ敵を呑むことです、敵を壓するので、引け

を取つてはゐるけなない。この初めの威壓が大事なのですが、あの鼠だけはこちらがどう壓迫しても、すぐ撥ね返つてくるのです。こちらが威圧高になればなるほど相手も強くなるのです。あんな奴は初めてです。』

『威嚇で閉口たれるのは相手が弱い時だけだよ。』と老猫は批判した。三毛は毛並の美しい、瞳の可愛い俊敏さうな年若い猫であるが、その性格をよく表してゐるやうに智謀主義を奉じてゐるのだが、それが自己批判して次のやうに語るものである。『私は武道は計略が第一だと思ひます。如何に力があつても技が優れてゐても、敵の計略にかかつてはお仕舞です。ですから私は左を攻めると見せては右を衝き、退くと見せては猛然襲ひ、斬り伏せられたと見せては敵の氣をゆるす隙に撥ね返して敵を倒すのです。その手で敗北したことはなかつたのですが、今度といふ今度は、敵はその手に乗つてきませんでした。敵の裏をかいてゐるのです。どうしたのでせうか。計略主義には何か足りないものがあるのではせうか。』

老猫は言つた。『宮本武蔵は佐々木岩柳の燕返し（うづはへ返し）の術にはかからなかつたね。燕返しといふのは、斬伏せられたやうな格好で地に倒れて相手が氣を抜く隙に、燕が撥ね返るやうな速さで切り上げる手だから……』

『貴殿は何を武道の極意となさいますか、技巧でもなく謀略でもないとする、闘志でせうか。』と訊いたのは虎であつた、もう大方の

問題が一通り出たので、虎は自分としては特に語ることはなかつたから……

『いや闘志ではない。闘志も威嚇と同じで、こちらのそれが大きくなればなるほど相手のそれも大きくなる。お互ひだから勝つこともあるし敗れることもある。技巧も體力も謀略も闘志も必要だ。いづれも皆、なくてはならぬが、大切なのは虚心坦懐であることだ。我を無くすることだ。我を無くするのだから無論相手も無くなる。空になるのだ。さうすれば、何處で如何なる敵に出遭はふと悠々獨歩することが出来る。然し、わしのことには自讃したくない。今晚のやうに、鼠一匹捕へるのに、刀を抜くなどは、そもそも末の末である。鼠捕にかけては天下無双であるなどといふ評判は、決して自慢になることではない。劔の極意は空の一字だ。だがこれは語つて語れず、書いて書かれず、寧ろ語れば事の眞實を誤つてしか傳へることができない。聖法も亦空なり、とあるやうに語ればみな偽になつてしまふ。道の極意は銘々が體得するより他に致し方があるまい。……自分のことは止めて、わしの師匠の話をしよう。師匠は一度も鼠を取つたことがない。いや、鼠を取る稽古をしたことさへない。大方は納屋脇の日向で居眠りをしてゐて、眼が覺めれば、食べ物を探しにそこら歩き廻る。若い頃は一族郎黨を引き具して近所隣りを押し歩いて、臺所などへ這入り込んで、お鉢の蓋を易々と取除して飯を食べてしまふ位のことはわけなくやつたのだが、後

には温しくなつてそれもやらなくなつた。ただもう著録した老猫のやうで、何の役に立つとも見えない。だが、この老猫の往く所、三四方は鼠が寄りつかなくなつたさうだ。別段何をするでもないのに、ただ老猫が一匹あるといふだけで、邪悪が寄りつかないのだ。劔の有難さはそこにある。破邪、勿論、結構であるが、邪を斬る前に邪を近づけなくて済むならば、これに越したことはないではないか。殺人劔でなく活人劔だ。

：：然し師匠はどうしたらそのやうに鼠を近づかせぬことができ
るかは、訊いても話してくれなかつた。

勝軒ははつと眼が覺めて半身を起して寮所の様子を伺つた。勿論そこに猫などの集つてゐるやうな筈はなかつた。然し彼は、自分の修行にまだ何か足らぬものがあるやうに思はれてゐたその何かを、はつきり掴むことができた。明けやすい初夏の朝がほのぼの和白んでいつた。(鈴木大拙氏「續禪と日本文化」の勝軒の猿物語に示唆を得て想を構ず。)

第二話 徳本行者といへば、あの特徴のある丸つこい字で六字のお名號をお書きなさつたお方かと、碑に刻んだ南無阿彌陀佛を思ひ出す人もあるであらう。

徳川末期の大徳で、念佛行者としては随分はげしい修行をなさつた珍らしい方として、箱根塔の澤、阿彌陀寺の彈誓上人とともに名

高い。紀州千津川の溪谷での御修行はとりわけ荒かつたとみえて、傳記には、

「ますますはげしく苦行せられしかば、兩の股腫れただれ、惡汗流れ出づること洵くが如くにして、その痛み堪えがたし。藥を用ふれどもかひなし。皮肉裂け破れ、あたかも藥研の如し」

などと書いてあるほどである。

文化年間のことであつたが、行者が攝津の勝尾寺で説法をしてをられる時、高崎藩の白井亭といふ劔士がはるばると尋ねてきた。そして講筵の末席に列つて聴聞してゐたが、その席の巍然として犯すべからざる空氣に深く打たれたやうであつた。翌日改めて行者を訪れて、造々と關東から出向いてきた用件を懇懇に語つた。

私の師範は寺田五右衛門と申して高崎侯に仕へる劔士であります。師範は行者が江戸へお出でなされて小石川傳通院の覺洲寮に御留鐵の折、御名を聞き及んで御拜眉の榮を得てをります。御教を頂き御十念をも授かつて、殊の外感佩し、多くの人にも語つてをりました。

私は師範についていささか劔道を修めた者であります。諸國を修行してどうやら腕に覺えも出來ましたので、上達を喜んで貰へること存じて歸國しました。

が、私の未熟のほどを知つた師範は大變な不興で、「一體お前は何の修行をしてきたのか」と頭から吐鳴りつけるのでした。私は自分

の修行の足らぬのを深く恥ぢて、「如何様に修行いたせばよろしいのでせうか」と尋ねますと、師範の申すには、「よき高僧など尋ねて修行の要領を承つてこい」といふことでした。今の世に高僧と申すのは行者より外にはあるまい。兎に角お尋ねして御教を乞はふとて、推参致した次第であります。どうか何なりとお教へ頂けますやうにお願い致します。——

徳本行者は靜かにこれを聞いてゐたが、話が終ると明るい微笑を湛へながら、

『わしはただの念佛の行者で、武道のことなど一向に辨へがござらぬ。念佛して極樂へ往生するといふことだけしか心得てはをらぬ。汝も後世のために念佛を勵まるるがよいぞ』

ただそれだけ言ふと、あとは鉦鉦を打ち敲いて靜かに念佛を唱へるばかりであつた。劔士はつらつらそのお姿を見てゐたが、その時、豁然として劔法の妙處を悟つた。

白井亭が後に人に語つた所によると、その時の行者の姿には分毫の隙もなく、一握りの撞木で千萬の敵に對することができるとも思はれる構へであつた。構へざる構へとも言はふか、無我、空そのまゝの姿であつた。亭は後には並びなき劔道家になつた。

師範の五右衛門もいよいよ行者の徳に感服して、同藩の圓勝寺本願和尚によくこの話をしたさうである。(行誡上人「徳本行者傳」による)——空の世界觀第三講——

椎尾辨匡・中村辨康序 林靈法著

「法然上人を憶ふ」

本會で取次ぎます

林靈法氏はこのほど「法然上人を憶ふ」を私版として刊行せられ、知人先輩等各方面に配布されたが、同氏の依頼により殘部若干を希望の方に本會で御取次いたします。同氏はかつて宗教的革新陣營にあつて活動し、のち圓圈の身となつた。折しも両親の急逝にあひ、ますます自己の思想に懷疑懊惱を深くし、遂に法然上人の偉大さによつて凡入報土に救はれた深刻な體驗を持つ人である。本書は同氏の體驗を通して告白と懺悔の内に法然上人の教義がつづられたものである。

椎尾辨匡博士曰く「著者は具さに萬斛の涙想に洗はれて遂に人生信仰に新しき光明を認めた道人である。君が憶ふ法然上人は陳套を列ぬる單なる叙事ではない。(序文より)」
中村辨康師曰く「この一篇を亡き両親の靈前に捧げらるる君の心情や如何。縁淺き私でさへ胸は迫り、涙はにじむのである」(序文より) B 6 版四四〇頁、實費三圓(送料共)

申込所 法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七番

鉄後湯之夏



出かしたを
銃後の安座



北より王族が
中庭に遊戯したと



大主君が
お少佐の
談話を
聞かされた



大戦果

舞臺の方で...
「何をしてゐるのだ
この邊で出てくる時
分なのだが...」
リン

水
温む

「敵前渡河だい、
橋なんか渡るも
のかい...」



銃後は
どうして

お少佐さんや
銃後の話を
聞かされた



物忘れする御主人

弱つたなア、タビとそれから五十點
ばかりのものをなくしちゃつたぞ...





擔當 中 村 辨 康

(質問 歡迎)

戰時生活と念佛信仰

(問)

念佛の中に戰時生活をなして行くにはどうしたらよいでせうか。また若い人達は念佛をいやがりますが、何か念佛唱名を徹底させる方法はないでせうか。また私の戰友が陸軍病院に入院して居りますが、前途が暗いと申して悲觀して居ります。どうしたら光明が與へられるでせうか。

右御教示下さいまし。

(盛岡市川原町二五、葛西賢人)

(答)

念佛の信仰は人間生活になくしてはならぬものでありますから、戰時生活にのみ限るわけありませんが、戰時には一層その重要さが痛感されます。自分の凡てを捧げて上御一人に忠誠をつくし、この小さな一生命を抛つて國家の大生命に寄與する

ことは、平時に於ても戰時に於ても亦た變りはない筈ですが、その心は念佛の信仰に依つて常に充分に養はれるものであります。

即ち念佛は己れの凡てを捧げる心を表白するものでありまして、忠孝心と信仰心とは紙一枚の差しかありません。忠孝の心に宗教感情が加味される時、そのまゝ念佛となるのであります。歸命の目標を精神的な大生命へ置くか、具體的現實的な無量壽へ置くかの相違でありますから、そこには少しの矛盾もあり得ないのであり、むしろ強化されこそすれ障りになるやうなものは何物もないのであります。

この故に「戰時生活をなす上に念佛を何うしたらよいか」ではなくして念佛を徹底せしむることに依つて戰時生活が段々完成される

のであります。その方法とその地位とに依つて異なるから常に一定してはおりません。

次に若い人々が念佛を嫌ふのは事實ですが、それは念佛が死後にのみ役立つと云ふ觀念が徹底し過ぎて居るために、念佛とさへ言へばすぐ「死」の觀念が聯想されるから「イヤな氣持」が起るのであります。然しそれは念佛をよく知らないからであり、且つ死生觀がハッキリ確立して居ないからであります。イヤ實は此の非常時局になりまして「死生觀」は一變して居るのですけれども、まだハッキリ自覺的にその理念が解明されて居ないのであります。事變前までは個人主義的の死生觀でしたから死生達觀も謂ゆる成佛主義的な悟でよいやうに思つて居たのであります。そしてそれは事實上云ふべくして行はれ難いものでもありましたけれども、今では大生命の中に己れの生命を抛出すところの往生主義的の死生觀に變化してしまつて居るのであります。之れは理窟ではありません、事實であります。されば「南無阿彌陀佛」と云ふ聲はな



いけれども、精神的には「南無阿彌陀佛」になつて居るのでありますから、説明しなへすればよく諒解出来るものと存じます。この故に「徹底させる方法」と「理解させること」より外にはないと思ひます。

次に陸軍病院に入院して居る戦友が悲觀していらつしやるとのこと、誠にお氣の毒で、他にも澤山さう云ふ方々がおられることと存じます。本誌でも「或る病兵の手紙」が數回に亘つて掲載されましたが、あの酒井廣美さんは何回も何回も安心したり疑問したりして行きつ戻りつかなり悩まれましたが、最後にはスツカリおちついて大安心の中に念佛しつゝ命終されたのであります。それはその臨終を親しく看護された戦友の鈴木良和君百合草久雄君等の諸君からの通知で承知しましたが、あなたが戦友であり且つお名前から察しますと御僧侶の方ら

しいと思ひますが、親しく面會される時とか又は御手紙などで信仰上の御話をなさつて段々と病氣の中に光明を見出すやうにとめられますならばやがて明るくなると存じます。

食作法を御教へ下さい

（問） 小生は夫婦間に上が九歳にて下が三歳の子供が三人あり、その他に

老いた母親がゐます、食作法と申しては大

げさですが、毎食に感謝を捧げるに最もふ

さはしいものであり、一同が揃つて出来る

簡単なものを教へて下さいませんでせう

か、單に「いたゞきます」といふよりは小

生が家長として一同に指圖できる儀式の多

少でも加味されたものが宜しいのですが、

勝手な申し分を致しました何卒御教示の程

を（本所區 向山政太郎）

（答）

食作法と云ふものを近來各處の鍊成會で行ふやうになりましたこと

は誠によろこばしいことであります。お宅さ

す。一度に徹底させやうとしたつてそれは無理と云ふものです。そして常に疑問が生ずるから常に御相談對手になつて上げられますやう努力して下さいまし。

まで食作法をなさりたいと云ふこと、是れまた誠に結構なことでは何の家庭でもありたいものだと思ひます。

佛教の食作法は大體に於いて「五觀」といふのが中心となつて居ります。五觀とは食事に就いて五通りのことを考へるのであります。即ち一には功の多少をはかり彼の來處をはかる（食料生産の勞苦を觀ず）二には己が徳行の全缺多減をはかる（自己を反省して果して食物を受け得る資格ありや否やを觀ず）三には心をふせぎとがをあらはすに三毒に過ぎず（人間の罪過は貪瞋痴の三毒の範圍であるからその貪瞋痴の制禦をすることを觀ず）四には正しく良樂をこととして形苦をすくふ



ことをとる（食物は飢渴を醫する薬であるから薬石とも言つて居るが、薬である限りうまいまづいを考へるのは誤りであることを観ずる）五には道業を成ぜんが爲にして世報は意に非ず（道の爲の食にして世間的な功利を念とする爲の生活でないことを觀ず）と默視し默想するのであり

おこぞりに就いて

（問）

甚だ恐入りますが、左の事をおたづねいたします。眞宗などでは本願寺にお詣りして「おこぞり」を御願ひするとのことであり、私の聞いて居るところでは「おこぞり」を頂いた人は死ぬと額に御印が見へる（私は見たことはありません）とのことですが、外の宗旨にもこんな事があるのでしょうか。右御教示の程を御願ひ致します。（熊本・玉名・江田・五野一之）

ますが、唱へてもよろしいでせう。この五觀を基として色々な文句が考へ出されて居りますが、どうもシツクリしたものにまだ出合ひません。椎尾先生のは「本當に生きんが爲に今この食を頂きます。與へられたる天地の恵みを感謝いたします。南無阿彌陀佛（三邊）頂きます」と云つて食事をなし、終つて、十念したのち「御馳走さま」と云つて御辭儀をすることに居ますが、これなどは一番よいやうに思ひます。

（答）

「おこぞり」とは「お頭剃り」のことです。つまつたもので、お剃度又は得度のことであります。むかしは「年分度者」と言つて朝廷から「何宗は一年に何人得度を許す」と規定されてその數がきまつて居たのですが、段々時代が進むにつれて亂雑になり、やがて宗派々々で勝手に行ふやうになつたので、出家でなくてもお髪をおろして「入道姿」になることが自由になり、「天下の三分の

二は皆な禿首なり」と言はれるやうにさへなりました。そんな關係から後世各宗で「在家の人」にも簡単に得度をさせることになつたのであります。言はゞ名義だけのお弟子になるのであります。群馬縣太田町の大光院では「吞龍様の御弟子入り」と云ふ「得度」があり、關東一圓に吞龍様の御弟子になると丈夫に育つ」と云ふ信仰から「子育吞龍」の名がかまひすしいのです。また善光寺などでも參拜者が「尼公上人」から「おかみそり」を頂くことを喜ぶ有様で、各宗共に「おかみそり」が行はれて居ります。禪宗淨土宗などの「お授戒」もまた得度であります。次に額の處に御印が見えるといふのは得度に就いてありますまい。善光寺で何年目かに「寶印」を額に當てることを致しますが、世俗ではこの「寶印」を額に押して貰ふと、死んでからそれがチャンとあらはれて地獄に行かないやうになるとの信仰がありますが、それが得度に混線して居るのでせう。おかうぞりにはそんな話を承つたことはありません。

庚申様に就いて

(問)

私共の地方では庚申様を各宗を通じて信仰して居ますが、庚申様とは何をまつりして居るものでせうか。尚ほ庚申様について御説明して頂きたうございます。(青森市・寺町・桑野善助)

(答)

難波鑑と云ふ本に「天王寺の庚申は諸國の本寺なり。一とせのうちに六度づゝ潤ある年は七庚申あり。何にても所願ある人、一色をばかなへ給ふとて、參詣する人々、初庚申よりも、願成就祝ひ納めの庚申詣でよと群集して、十二燈々々々と呼はる聲もかまびすしく、七いろの菓子々と賣る聲もいそがし。さてまた今日、夜を寢ざることは、三戸、天に上りて人の善惡を告ぐによりて、夜



をまもりてね侍らぬとかや」とありますやうに「ねがひごと」が成就するやうにと祈る爲にまつるのは後世のことで、その初めは、人間の身中に「三戸」と云ふものがあつて庚申の夜にはその人の寢て居るすきにくつそりと天にあがつて、その人の罪過を天帝へ訴へます。それで軽い罪の人は三日、重い罪の人は三百日の壽命が縮められますから、その晩は眠らずに三戸の出で行かないやうに守つて居る必要があると云ふので、庚申待と云ふことをするのですが、これは支那道教の風習が日本にも傳來して今に尚ほ俗間に信仰されて居るものであります。

庚申の像は中央に青面金剛、その下に猿形神を圖してあります。猿形神は不見聞不言の三猿で、これは道教にもないことですが、孔家語の三絨の故事がこれに混同したものであらうとの事です。また青面金剛は庚申と何

の關係もないのですが、九大青面金剛呪法に「傳戸氣病を患ふるもの、呪を誦すること千遍せば其の病即ち愈ゆ」とあるその「傳戸」と道教の「三戸」と語呂を合せて青面金剛をまつることになつたのではないかと申します。一説には猿田彦大神を祭るのだと云ひますが無論附會の説で取るに足りません。またむかしは「庚申代待」と云ふのがあつて、乞食が青面金剛の像を書いた旗を持つて、自分が代りに「庚申待」をして上げると云ふことでお金をもらつて歩いたのですが、今ではもう見ることが出来ません。また現在では庚申様の日は謹んで居て悪いことをしないやうにしようとする道德的信仰もすたれてしまつたやうです。

一瀬 直行著

新刊 創作集「心の窓」

B 六判定價一圓四十錢

東京市下谷區上野櫻町木二

發行所

櫻 木 書 房

法語
話語

お淨土の座席とお土産

伊藤 宏 天

「悪しきをばおのが分と心得よ」との祖語の御指示や、信機信法の順序で、罪惡觀が淨土入信の経路であることやの解説がもとで、説く者も聴く者も、よく同信の間で「業人」の語を、上につた形で口癖のやうに使はれますが、深い反省と強い自覺の伴はない限り、却つて愚痴をこぼす常套語になつて仕舞ふのでは有るまいかと思ひます。

先ごろの事です。住職は二度の應召で、今、南方に服務中、其の妻君は國民學校奉職のため大方不在。結局お寺の留守は先代の未亡人が雇人を使つて、何うぞ斯うぞ、間に合はせて居る形。他に斯うしたお寺も多い事と思ひますが、縁につながらる關係、時々は慰問する

と思召せ。

「私は何と云ふ業人やら、長い一生、勤めるだけの事は勤めて來たつもりですのに、偕て、今、お淨土へ歸る一段になつて、食べる物さへ思ふやうに食べられぬとは……」

時局をわきまへぬ全くの愚痴です。同信として云はせて置いて良いことでせうか。同情はしながらも私は聞きとがめました。

「小母さん駄目ですよ、お淨土へ歸る一段になつてなどと、まるで御淨土の座席券が取つてあるやうに云はれますが、其んな考へで居たら、今が今、いきが切れても、お淨土の門は四方八方戸締めですよ。高嶺乗り越えて飛び込むだけのカイショはあるまいし、さらば

とて出戻りがきくやらきかぬやら一向あてにならず、結局はウロ／＼と迷ひ歩くぐらひが落でせうヨ」

「まさか……」

やさしく冗談まじりに云つたものですが、本氣に受けて呉れない様子に、私は、少しまじめになつて

「斷じて其うです」

強く云ひ切りました。すると多少は不安になつたらしく、

「何うして……？」

一とひざ乗り出して來ました。いめいめこれでこそ本調子だ。私は心中ひそかに喜びました。たづねられずとも、説き伏せねば居れぬ私の立場ですもの。

「小母さん、考へても下さいよ。成る程、仰言る通り、長い一生、勤めるだけの事はお勤めになつたでせう。其の御苦勞を知らぬ私では御座いませぬ。其の代り、食べることも一人前、着ることも一人前、受けるもの頂くのも、なにかも一人前に使つて來たのでは御

座いませぬか。

勤めることも一人前なら使ふのも一人前、勘定して見ると五分と五分、差引ゼロで手柄さうに云ふ可きことは何も御座いません。當りまへのはなしです。

私は常に云ふのですが、お互ひは何れも夫れに御用仰せつかつて、この世へ働きに來たのです。此

れが私の處世觀です。故に、私は又斯うも申します。

仰せのままに出て來た身體、仰せの

ままに最後のひといきまで御用をつ

とめ、御用がすむだら仰せのままに

親元へ歸るばかり、死生一貫、生き

死に共にわづらひなし

これが私の人生信念です。早晚、親元へ歸る

のです。小母さんがお浄土へ歸る、一段になつ

てと仰言るのも、つまりは其の氣持ちでせう

が、此れが今までのやうに、一人前に勤める

だけは勤めたにしても、食べるもの着るもの

使ふもの皆一人前では、差引勘定すれば五分

と五分、何にも残らず手ぶらじやないか。たとひ親元へ歸るにしても、手土産の一つぐらひは欲しいのが人情、全くの手ぶらでは、體裁の悪いものであります。

其れが今日この頃まで生き永らへたおかげで、食べるもの何割かへらし、着るものもへらし、頂くもの使ふもの總てに何割を減じて、勤める方は息子の分も嫁の分も何十割を増したとすれば、差引勘定しても何れだけか立派に残る。其れが親元へのお土産に成るものであります。

三年も前に死んで居たら全くの業人で、お土産無しで親元へ歸らねばならなかつた者が時節のおかげ戦争のおかげでお土産山持つて親元へ歸らせて頂ける有難さ、何といふ果報者やらと喜んで下さつたら、いつ何時、目をつぶつても、お浄土の門は開けつ放し、交通は自由自在、大道無碍、たん／＼としてお浄土へ通じて居るので御座います。」

私は所信の趣き、自得の法味を、熱誠こめて説きつづけたのであります。相手の小母

さんが

「よく解りました」

と喜んで下さることと豫想して居ましたのに、何うしたとか、何とも云はずにうつむ

いて、火鉢の灰をせせて居られるのには、

少々もの足りなさを感じましたけれども、或

は、きまり悪さのテ、かくしかも知れぬと輕

く話題を他に轉じたのであります。

然し、何うしても氣にかゝりますので、私

は日を改めて訪問した時、

「小母さん、先般のお話、何うお考へです

か」

と、思ひ切つて追及して見ました。

「其れは貴僧の仰言る通りですけれど」

何うも奥歯にのものはさまつたやうな返事で

あります。私は落膽しました。

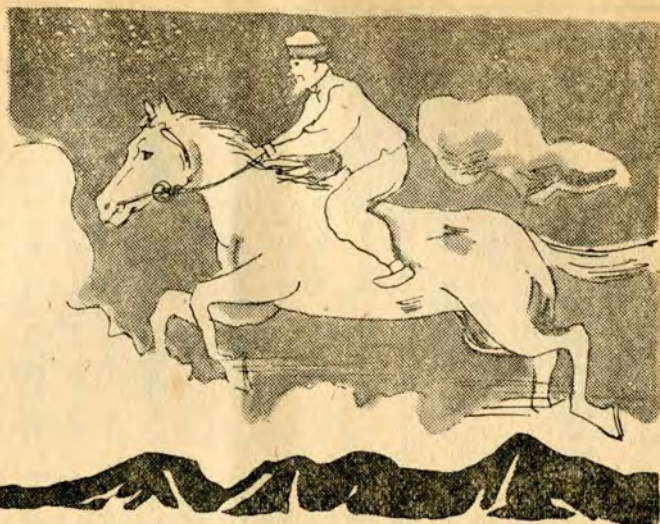
「けれど」と云ふ。これだけは全く餘分

です。不用です。

然しお互ひにも、斯うしたくせがあるの

は御座いますまいか。反省して改め度いもの

であります。



吳鳳をたづねて

臺灣〇〇部隊 魚尾晃久

するであらう。

私は大東亜聖戦下に飢の御桶の一

人として召され、いま落葉の地、嘉

義の軍隊に御奉公してゐる。その嘉

義から山里へ向つて一里餘り——蕃

子潭こそ、これから語らうとする吳

鳳が父吳珠に伴はれて福建省より移

り住みついた所に外ならない。巷で

は、本島人は勿論、内地人も「吳鳳

さん、吳鳳さん」と尊敬と親しみの

語を以つて彼の姓名を忘れようとし

ない。私もこの土地に來、この有様を見て、

嘗て小學生時代に覚え知つた吳鳳に就いては

思ひを新たにすると共に、當市の加土印刷所

主人、岡野初太郎氏の御厚意に據り、多少吳

鳳に關する資料を得たので、忙中暇を得てこ
の筆を執ることにしたのである。

馬來系統に屬する生蕃は、所謂高砂族と稱

せられて、タイヤル、サイセツト、ブタン、

ツオウ、バイワン、アミ、ヤミの七種族に分

類することが出来るが、阿里山蕃はツオウ族

に屬してタイヤル、ブタン、バイワン族につ

いで強猛を極めた一蕃族であつた。

彼等蕃人が出草——人の首を取らうとする

時は、壯年への仲間入りをする時爭議を決し

ようとする時、嫌疑を解き又は冤を雪がうと

する時、結婚の競争に勝たうとする時、悪疫

の流行を祓はうとする時、凶兆を豫知してそ

れを祓はうとする時、自己の武勇を誇らうと

する時等で、取つて來た首は新しく設けた竹

吳元輝——といへば親しみを感ぜないが、
阿里山通事として蕃人の陋習を矯め、われと
わが命を絶つて敵首の風を絶えしめた義人、
吳鳳の字であると知れば、何人も直ちに首肯

棚の上に置き、その口に豚肉や蕃薯を銜まして、全社の者が集つて所謂「首祭り」をするのである。そして祭詞を唱へ、酒肴を列べて宴を張り圓陣を作つて舞踏する。この恐るべき風習は、臺灣が清領時代からあつたもので、理蕃上に一大支障をなしてゐたものである。このやうな弊風がどうして出来たかと言ふと、昔、蕃人どもが野獸を屠つて食つてゐた時代に、或るとき犬を食はうとして、その首を切り竹の先につけてみた所が、何とも言ひ知れない快味を感じたところから、人の首ならなほ面白からうと到頭人の首を取るやうになつた。と傳へられてゐる。

何處の民族にも神話があるやうに、阿里山蕃にも幼稚ながら口碑が傳へられてゐて、それによると、彼等の祖先は天から降つて来て新高山に住居してゐた。當時の人間は不老不死ともいふべき長壽を保つて何時でも若々しく健やかに生活してゐた。そして日毎に繁殖した子孫達は夫と良い土地を選んで離散して行つたが、或る年俄かに大洪水があつて見る

／＼裡に四方は大海と化したので、離散した者どもは再び新高山の頂に集つて來たのであつた。

吳鳳がかうした口碑と習慣をもつ阿里山蕃の通事となつたのは康熙六十年、わが天和二年の時、臺灣は福建省に屬し首府を臺灣府と稱してゐた。清朝は高砂族に對して武を以て之を威し德を以てこれを懷くるの政策をとつたが、移住支那人が年と共に加はるに及んで平地の肥沃なる部分を侵略し、先住民たる蕃人は日を迫ふに従つて山間僻地に逐ひやられるに至つた。従つて官蕃の間に立つて官命を傳達し、蕃祖を監し交易を掌るを職としてゐた通事も不當の利を貪り蕃人を酷使し或は蕃女を奪ひ兒女を賣買する等の暴行をなしてその弊害は止まる所を知らぬ有様であつた。その結果、蕃人の支那人に對する恨みは年を加へるに従つて深くなり骨髓にまで達するやうになつたのである。そして、呪はれた銃火を以つて荒れ狂ひ山間に潜伏して人の首を取つて清人への恨みを晴してゐた。さうした實

黒光女史から恒例花祭りの 淨財を寄附下されました

(新宿中村屋の花祭り——異色ある降誕會として有名ですが、今年も亦質素ながら華やかに営まれました。相馬黒光女史から例年の通り淨財を左記のやうなお手紙をそへ本會に寄附下されました。)

今年の釋尊降誕會は誠にさびしいものでした。材料が入手出来ませんので、お供物は勿論、甘茶も出来なかつたのです。甘茶のない灌佛會も妙なものです。けれど致方ございません。然るに降誕佛の前で心ある方は合掌してお賽銭を捧げて行かれる姿の尊さ、この淨財合計金拾四圓五十八錢也になりましたから振替にして御送金致します。それで「淨土」一部なりと多くの方々におわかち下さらば幸甚と存じます。この受領書を頂き店に掲げて顧客にお目かけ度と存じますから御面倒でも受領書を御送り願上致します。

四月十二日

相馬 黒光

法然上人鑽仰會御中

情の下に、彼吳鳳は僅か二十四歳の若さで通事となつたのである。永い星霜に互つて行はれて来た職習を矯めんとする彼の決意の裏には死をも辭せない勇猛心があつたことは勿論である。その彼の決意を裏切るかのやうに、彼れが通事となる前年、無慘、一度に四十何人かの人間の生首がとられたのであつた。彼れは先づ、一年に一個づつ祖先に供へるやうに戒めた。しかし、それさへも容易なことではなかつた。孜孜として朝には社口へ赴き、夕に歸りては蕃人の來訪に忙しく戒めては歸し行きては戒めて四十餘星霜、その間に彼は長男汀援を喪ひ、また内助の功厚き妻良徳に先だゝれてゐた。

彼が通事になつてから間もなく、或日彼は我が家なる舊子澤の自家に蕃人一同を招いて酒宴を張り、先年暴擧して清人を殺して得た首級の數が四十餘個であることを知るや、緩和の一策を案じ、前年取つた四十幾つかの首級を毎年一つづつ祭に供へ、年を経てその首級が盡きたなら、その時に議することにし、今

後は通事に無斷で人を殺すのを絶対に止めることを誓はせたのであつた。彼の誠意はこゝに蕃人共の首肯する所となつて遂にその命をきくに至つたのである。そして毎年、彼は祭には嘗てとつた首を祭らせ、官として牛豚、布帛の類を贈つて祭壇を賑はしてやつた。その間、出草、該首の聲は絶えて平和な日が過ぎた。彼の一身を捧げての教導に、蕃人の信望は益々強くなつて行つた。しかし、遂に首級は四十餘個しかなかつた。吳鳳の生命も風前の燈火に等しきものがあつた。彼等阿里山蕃は、他蕃が依然として該首の喜悅に酔ふのを見ては幾度、吳鳳に該首を願ひ出ては教をきき、如何にも感動して靜かに歸つて行つたことであらうか。たゞ、彼等はひそかに誓ひし期日等待つのみであつた。その彼等蕃人にとつて耐えしのんだ四十幾星霜も過ぎて、次の祭に供へるべき首級のなくなる日が近づいて來た。小躍りして喜んだ彼等は社口に吳鳳を訪れて首を請うた。が、なほも諱されてみると吳鳳に無斷で該首することも出来なかつた。かうした年が續くと、彼等の要請は年毎に強化されて來て、吳鳳も遂にそれを慰諭しきれなくなつて來た。かくすること三年、大流石の蕃人も疑を生ずるに至り、また、大切な祭りに首が無くては神の怒りを招くのではないかと不安でならなかつたのである。かくして萬策ごとく盡き、吳鳳自身、自ら死を覺悟して遂には身を以つて斯の如き民に代らんことを心に誓つたのである。彼は今日ある日をとうに覺悟してゐた。彼は最後に、流れる涙を袖におさへて戒めた。人を殺すことは王法に背くばかりでなく、その罪もまた非常に重いものであることを——。しかし彼等はもう聞き入れようとはしなかつた。彼は何故わかつて呉れないのかと悲壯の涙にむせび明日を約してその日は判れた。そして一夜まんじりともせず考へ抜いた。もう彼等との約束を破ることも出来ず、それとて罪なき人々を彼等の犠牲にすることも出来なかつた。彼はその時、既に七十二歳の老年になつてゐた。彼は叫んだ！ 我が生命を與へて彼等の

つた。かうした年が續くと、彼等の要請は年毎に強化されて來て、吳鳳も遂にそれを慰諭しきれなくなつて來た。かくすること三年、大流石の蕃人も疑を生ずるに至り、また、大切な祭りに首が無くては神の怒りを招くのではないかと不安でならなかつたのである。かくして萬策ごとく盡き、吳鳳自身、自ら死を覺悟して遂には身を以つて斯の如き民に代らんことを心に誓つたのである。彼は今日ある日をとうに覺悟してゐた。彼は最後に、流れる涙を袖におさへて戒めた。人を殺すことは王法に背くばかりでなく、その罪もまた非常に重いものであることを——。しかし彼等はもう聞き入れようとはしなかつた。彼は何故わかつて呉れないのかと悲壯の涙にむせび明日を約してその日は判れた。そして一夜まんじりともせず考へ抜いた。もう彼等との約束を破ることも出来ず、それとて罪なき人々を彼等の犠牲にすることも出来なかつた。彼はその時、既に七十二歳の老年になつてゐた。彼は叫んだ！ 我が生命を與へて彼等の

悔心を求めよう」と。

約束の如くに、彼等蕃人が朱衣紅巾の人の首を狂せんばかりに悦び勇んでとつて熟視した時、何たることか、彼等一同が尊敬して止まなかつた吳鳳通事であつたとは！ 彼等は懼れて首を棄て、我れ先にと蕃社へ逃げ歸つた。流石の彼等も悔恨の情に堪へなかつた。

ある日のことであつた。數名の蕃人が阿里山琢鼻嶺の峻路にさしかゝつた時、その眼前に吳鳳の英靈が白馬に乗り空行くのを見た。彼等は狼狽して懸崖から墜落して惨死するものさへあつた。迷信に強かつた彼等が、吳鳳の靈を見て狂氣することは無理ならぬことであつた。それから、夜は夢に晝は幻となつて彼の白馬に跨つた姿は蕃社の到る所を駆け廻る日が續いた。それに加へて、疫病が流行して斃れる者相繼ぐといふ悲劇が彼等を見



舞つた。萬策つきた彼等はルーボを招いて神意を仰いだ。その結果彼等は協議をして吳鳳

の靈に誓ひをすることにした。八掌溪の水が西より流るゝとも太陽が東に没しようとも、

はたまた大きな石を埋めたその石が腐ることも、決して人の首は執らないと——。各社からは男も女も子供も、悉くが集つて神へ祈り罪を謝し、いとも嚴肅な式を擧げて誓ひの酒杯をなし踊り狂つた。かうして終日の神への誓ひの祭りがすむと、初めて彼等は清々しい氣持になり生き返つた様な人間になつた。さしもの大疫病の流行も止み吳鳳の靈も出なくなつた。再び平和な蕃社を迎へて彼等は更に吳鳳の偉大さに胸打たれるものがあつた。それ以來、春風春雨、二百年の今日まで阿里山蕃社からは敵首の風が絶えたのである。戦捷に輝く昭和十八年の紀元の佳節に當つて、臺灣の新聞は高砂族の戸籍制度の確立を報じてゐる。これは誠に山地居住の十萬高砂族にとつて待望久しかつたもので、實に赤誠に應へやうとする彼等の地位の一大進展に外ならない。吳鳳廟に祀られてゐる彼は、志願兵の制度、義勇隊の示す烈々たる皇化の彼等を見て莞爾としてゐることであらう。

俳壇



和歌山縣大阪陸病高野嚙狸庵
どの家も瓦葺なり梅の花

評 瓦葺であるといふ發見と作者の心持がはつきり出てゐるのがよい。梅の名所と瓦葺の家々の調和もよい。

岩國市 長岡 白朝

春眠や隣の家の時計巻く

評 春の日永のけだるさ。うつら／＼してゐる時に隣家で時計を巻いてゐるのがきこえるといふので、日常茶飯事であるが、そして時計できこへるといふわけではないが、一種の雰圍氣をかもしてゐる。

今治市 三木 光子

うららかや紅の布團の屋島駕籠

評 屋島を見物する爲めに用ふる駕籠に敷いてゐる紅い布團を中心としての雰圍氣を詠つたものであらう。繪にかいて見ても如何にも麗かそうである。

満洲三江省 鶴岡 慈禮

山焼く火よく見えて来て日暮れけり

東京 三野輪幸節

花屋花にくもりてゐるや山は雪

高崎市 大塚 光高

山吹に一塊の霧匂ひ來ぬ

明石市 山本多可子

澄のつにくれぬ宵月夜

名古屋 堀場 典雄

一匹の蝙蝠飛んで花暮れぬ

東京市 井原しま子

山峽の縁に桃の花美しき

同 山本 竹泉

彼岸詣弘法のもぐさ買ひもして

名古屋 鶴田 稱眞

梅よりは桃に驚とまりしなり

東京市 清水金鈴子

誰あられ大さ故郷戀ふるなる

小樽市 中村 もん

雉子の聲山を徹して啼きいでぬ

京都市 戸田 愍誠

大試験終りて仰ぐ春の空

北海道 高島喜八郎

春晝や門衛を訪ふ人もなく

兵庫縣 水谷 良子

薬打ちて乾ける音や揚雲雀

函館市 木村 多吉

生きるだけ生きん朝風春の風

岐阜縣 立木 眞實

水仙のむざんなる日を悲しめり

東京 萩原 通孝

芋がらのしけて降り出でぬ春の雨

兵庫縣 王井 利一

佇めば白衣に落花よる如く

大阪市 山口 好三

名月やつれ／＼の人散じゐる

郡馬縣 松本 時雨

冷雨中來りし靴を脱ぎにけり

名古屋市 熊澤 秀國

春宵の花の吹き入る窓となる

高岡 内山 覺阿

かげろふに立連峯の揺り浮ぶ

大阪 森本 清浩

春雨のはるれば乾く路となり

兵庫縣 矢場 天橋

テル／＼坊主むなしくなりぬ春の雨

京都市 今江 清一

病室の風の清しや春の行く

栃木縣 大輪 益啓

高きより名残の花の散りきたる

青森縣 高松美紀子

どこまでも櫻若葉の道つゞく

富山縣 佐伯 光安

二三日掃除おこたる花むしろ

京都市 拜郷 賢之

暖かく玩具を運ぶ庭かな

愛媛縣 折出 双生

代々の城主の墓や花の寺

東京市 坂口 康夫

揚雲雀みどりの空のなき雲

柏崎市 市川 繁

ハンマー鳴りベルト廻りて雪解くる

青森縣 丸尾 傳山

鯨船にぎわしてゐる天氣かな

東京市 丸山 紅葉

雨にぬるる馬たくましく耕せる

京都市 永田 七郎

霽を分けて行く舟消ゆる霞かな

北海道 花田 順往

さみだれの見えてふりある青田かな

大阪市 森山 清殿

春燈下我も皇民の一人なる

長野縣 久保田 穰

管制の灯の下の夜學かな

投稿規定

官製はがき一回二句以内とし住所氏名明記の上「淨土」欄郵部係あてに送ること



好めばおのづから發心す

…… 法然上人法語解説（其十八） ……

中 村 辨 康

法 語

問ふて曰く、往生を願はぬにはあらず、願ふといへどもその心勇猛ならず、また念佛を賤しと思ふにはあらず、（然し）行じながらおろそかにして明かし暮らし候へば、かゝる身なればいかにもこの三心具したりと申すべくもなし。さればこのたびの往生をば思ひ絶え候べきにや。

答へて曰く、淨土を願へどもはげしからず、念佛すれども心のゆるらかなることをなげくは、往生の志の無きにはあらず、心ざしのなき者はゆるらかなるをなげかず、はげしからぬをも悲します。急ぐ道には足のおそきをなげく、急がざるみちにはこれをなげかざるが如し。

また好めばおのづから發心すと申すこともあれば、漸々に増進して必ず往生すべし。

日ごろ十惡五逆をつくれるものも、臨終にはじめて善

知識にあひて往生することあり、況んや（平生に）往生を願ひ念佛を申してわが心のはげしからぬことをなげかむ人をば、佛もあはれみ菩薩もまもりて障りをのぞき、知識にあひて往生を得べきなり。（十二箇條問答の第七問 答）（法語抄七五、七六）

解 説

かう云ふ問者のやうな氣持は誰にもあるもので、むしろこれは眞面目な信仰ある初心の人の氣持を代表して居るものかと思はれます。

然しながら此の質問の中には二つの混線があるやうであります。

一は往生を死後の往生として居る點であります。即ち「變易生」と「分段生」とを混同して居ることであります。この故に「往生」が願はしくもないことないけれど

も、まだ婆娑にも生きて居たいから、その願ふ往生は壽命の盡きた曉のことであつて、いま直ちにと云ふのでないから、突きつめて希念する程に強くないと云ふわけであります。この問者はそこを反省しての質問であります。

またもう一つは口稱念佛以外は往生の行ではないと思ひ込んで居るところに、平生の業務生活と口稱念佛との矛盾を感じて起す疑問であります。

つまり口稱念佛することのみに「三心具足」の信仰事實ありとする爲に、平生の怠り勝なる念佛の「執心ならざる」事實を顧みて不定に思ふのであります。

第一の問題に對して、昔の人は生死の問題を「分段生死」にのみ取り扱つて居りましたから、法然上人が「一念に一度の往生」と「往生」の生は分段生ならざる變易生の「生」であることを明らかにされましたがその意味をよく理解することが出来なかつたのではないかと思ひます。此の故に往生を「死んでからのち」のことにのみ考へて居たのであります。これは今も尚ほ大多數の人々がさう考へて居ることではあります。然しそれはまだ先入觀念の執着が抜け切れて居ないからであります。随つて、本當の正しい「死生觀」が確認されないのであります。

如何にかいだが丈夫でありましても腑抜けや馬鹿では何にもなりません。むしろ穀つぶしであります。されば本當に生甲斐ある生活でなければなりません。實際に生甲斐ある仕事をしなければ死んでも死に切れるものではありません。それにはどうしても先づ心を生かして而してのち身體をいかさねばならないと思ひます。先づ心が生きないと身體も生きて來ないからであります。もとより色心不二でありますからからだが生かれば心もいきる筈であります。が、實際に理論的な根據を得ることが先決問題です。それが何の程度まで理解し得たかはむしろ第二の問題ですがシツカリした基礎のあることを承知するのとしないのでは意識の上に大きな相違があり、随つて外に現はれるものに大きな差異を生ずることになります。

一旦こゝろが覺醒すれば、それからは身體も生き物事も生かします。また物事が生き身體が生きることに依つて心も一層生かされて參ります。こゝに初めて「色心不二」の理が納得されませう。

しかもこの「生きる」ことがよく理解されますと正しい「死生觀」が確立します。死生觀がはつきりすれば「往生」と云ふこともよく判つて來ます。即ち「變易生」の

「生」がはつきり認識される時、分段生死よりも變易生死の方が自分の生活に取つて最も「大事」なことであることが判ります。即ち生きて居て往生を是認する事が出来た第二は口唱念佛のみが念佛であつてそれ以外は念佛でないとするところから、自分の現實を反省して見ると、生活することに迫られ勝であり口稱念佛なることが怠り勝である事實がなまけなくなつて「これでよいのか知ら」と疑ひを抱くことにもなりますが、それは念佛と云ふことの標準を、最低のところに置いたからこそ「稱名」と云ふものになつて居ることを知らないからであります。

佛教の眞の目的は「人々を本當にいかす」ことにあるのですから、私達が若し「本當に生きる」ことが出来れば自分自らに満足することが出来ると共に、それはまた眞に「佛教に随順する」ものともなつて居るのであります。

彌陀の本願に乘じ淨土に往生することも、或は見性成佛すると云ふことも、また即身成佛と云ふこともこの本當に生きたと云ふことにより外にはありません。即ち成佛と云ふことは完成した最後の状態に名づけたものでなく、覺醒した初一念から云つて居るのであります。

即ち「初發心地便成正覺」と云ふ言葉を理解すべきであ

りませう。若し成佛位が圓滿究竟の状態であつて更にその上の進歩がないとするならば、成佛以後は最早や芯が止まつて居るものであります。それでは行き止りであります。されば無限の進歩が無上正覺でなくてはなりません。正覺とは譬へば「月」であります。三日月も五日月も同じく月であつて、月としての價值は均しいのであります。十五夜の月も廿三夜の月も同じ價值の月であります。それと同じやうに「初發心」も「究竟大覺位」も價值として均しいのであります。何となれば「眞實に生きる」ことに區別はないからであります。

淨土の信仰もこれ以外の意味を持つて居るものではありません。淨土とは「眞に生きる世界」のことです。即ち「諸の上善人と俱に一處に會する」世界の事であり、その上善人とは眞實に生き行く人のことであります。それを目標として正しい人生たる白道を精進するのが念佛信者の眞の姿であります。佛教の修行法である三十七道品も六度四攝法も結局はこの目的の爲のものであります。それをもちと大衆的に平易化したものが淨土門であり、淨土門の最も特色たるものが「標準」を口稱の「念佛」に置いたことにあるのであります。この「念佛」に依つて佛教

の目的とするところに到着しようとするのが法然上人の御教なのであります。しかもその「念佛」することが如來様に南無する「信」を基礎として居るのでありますから、その心がある限り、口にばかりでなく、手にも足にも身體にもその「南無」の心が現はれなければならぬ筈であります。つまり仕事しながらも、その仕事に「南無阿彌陀佛」の氣持でなされて居なければならぬのであります。しかも仕事に一心になつて居るところ、そこにはむしろ如來様のことも念佛稱名することも何時の間にかただ忘れ去つて仕事そのものに熱中して居る姿が、即ち身體で唱へる念佛であります。この聲なき身體の念佛の境地こそ此の上もなく尊い念佛の國家的表現となるのであります。

かく言へばとて決して念佛の信仰のない人の仕事をまで「念佛」と云ふのではありません。念佛心の中からする無私の仕事即ち背私向公の仕事と言つて居るのであります。即ち如來照鑑の中に如來さへ忘れて居る一心の姿を指して言つて居るのであつて、如來照鑑の中にありと言ふ根本的な意識までを失つて居るものではありません。

この道理がわからない爲に「念佛」を忘れて居るかの如く思ひがちをして「念佛すれども心はげしからざる」

如くに考へて自らを疑つて居るのではないかと思ひます。何れにせよ。この問者は折角信仰を持ちながらまだ信仰の理解が不十分であります。まだ多少存在的な考へがあり随つて功利的な考へが若干残つて居るから、かうした不安が起つたのでありませう。之はやはり熱心であればこそ起した疑問なのであります。それにしても法然上人の御答は誠に憶ひやりの深い慈言で、心から頭が下ります。

これに關して別段解釋の必要もありませんから省略させて頂きますが、唯だその中で「好めばおのづから發心す」と云ふことを引用されて居らるゝことを注意したいものです。何事も「好ま」なければなりません。好めばやがて堂奥に到達することが出来るからであります。「好めば漸々に増進す」全くその通りで、何事も急速の進展は出来ませんし、また漸々に進むのが本當であります。

阿彌陀佛に染むるころの色に出では

秋のこすえのたぐひならまし

の御歌のやうに、段々色がこくなるのが本當で、急に濃くなつたのでは、逆にさめる恐れもあります。要はやがて心を用ひずとも心のいたされるやうになるまでつとめて行きたいものであります。

編輯後記

◇中村辨康先生はこの程浄土宗大本山増上寺の執事長になられました。先生の健康は近時頗るよく、疲れを知らぬ活躍振りが大いに期待されてゐます。とかく沈滞の評ある増上寺を關東一の大本山らしく教化の中心道場として更新される日も遠くはありますまい。尙先生は同寺に常住されてゐますので、本山參詣の際にいつでも先生にお會ひすることが出来ます。

◇同入和合の雑誌であると銘打つて糸山大眞氏が主宰してゐた月刊雑誌「天真」は遂に廢刊となりました。同誌は糸山氏が孤軍奮闘よく八年間に亘つて異色ある筆陣を張り多くの愛讀者を持つてゐましたが、「自爆廢刊」決行には云ひ知れぬ寂寥を感じます。糸山氏は今後全力を擧げて宗祖のために本會のお手傳ひをして下さるとのこと

であります。

◇本誌はこれまで用紙不足による頁の不足を内容で補ふべく努力してきましたが、來月號から更に編輯方法を變更いたします。本月號から漫畫を一頁にしましたが、更に來月號から各欄を廢合します。

◇吉田絃二郎先生から今月は「房州の旅」を頂きました。深謝致します。

◇佐藤春夫先生から久し振りに玉稿を頂きました。理論を振り廻して信仰に入らうともしない學生を鈍感だときめつけたあたり、先生の面目躍如たるものがあります。かつて先生が「觀經の絢爛さには目がくらむやうであつた」と語られた言葉をフツ思ひ出しました。

◇子母澤寛先生はいつもながら興味深いお話を下されました。先生の獨壇場とも申すべきでせう。

◇表紙、扉、目次畫の牧野醇氏は旺玄社の總帥牧野虎雄畫伯の實弟

で、今後とも本誌の表紙畫をお執筆下さる筈です。(村瀬)

◇本書に對して種々端書で御問合せがありますが、いづれも通信料付きで御願ひいたします。

◇會員で御住所變更の際は忘れなく前住所を御記載願ひ度いで御座います。前住所がないと記帳整理上甚だ困難致し、誤りを生じ易いのです。

◇別項にもお願ひしましたが新入會及び繼續の會員は會費を御送り下さいませ。際必ず「新入會」又は「繼續」の旨を御明記願ひます。會費の領收に際しては、一々領收書を發行致しません。

◇好評を博した「浄土宗讀本」「信仰讀本」「法然上人法語抄」「法然上人の信仰生活」は品切れとなつてをります。再版は考慮中ですが何時になるかまだ不明です。

◇書籍は御注文の際は送料を御忘れなきやう願ひます(庶務部より)

淨土

六月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和十年五月十日印刷納本
昭和十年六月一日發行

(定價十二錢)

東京市芝區芝公園十五號明照會館

編輯兼 眞野 正 順
發行人

東京市芝區芝公園十五號明照會館
印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區飯町七 (車庫一)

印刷所 大日本印刷株式會社

配給元

東京市神田區渡路町二ノ九

日本出版配給株式會社

發行所 法然上人鑑信會

東京市芝區芝公園明照會館内
電話東京八二一八七番

「浄土」購讀規定

一部定價 金十二錢

(送料一錢)

會費 金一圓五十錢

一ケ年 (送料共)

強腦・強精に光明丸



腦病全身神經
系諸病腦溢血
鼻耳小心恐怖
腦毒症神經痛

主治能
 腦病、神經病、腦神經衰弱、不眠症、ヒステリー、てんかん、ヒキツケ、小兒麻痺、腦膜炎、腦毒症、腦溢血、高血壓、半身不隨、心悸亢進、耳鳴、逆上、頭痛、頭重、肩首コリ、(性)鼻病、耳病、多夢惡夢、頭腦力減退、記憶力思考力減退、健忘症、小心恐怖症、恐迫觀念、憂鬱症、取越苦勞雜念妄想、胃腸障害。

光明丸は腦疾病、神經系統の疼痛や硬直痙攣、動脈硬化高血壓を治療し神經を鎮め腦毒や全身の病毒鬱血等を除去し血行を整へ全身を賦活し種々の不快苦痛なる症状を取去り眞の安眠に導き強腦強壯ならしめ頭腦力記憶力思考力を増強せしめ心から心身共に健全明快に導く即ち根本原理に即した合理的優秀薬であります。

試供薬と
説明書を
進呈

有名薬店、百貨店二有り品切ノ節ハ直接本舖へ注文セテ

薬價
 同德三十五
 用日二日
 十五七五二二
 圓圓圓圓圓圓

(本舖) 京都伏見いなり山 願成閣
 (代理店) 全國一流賣藥卸賣會社

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可。(毎月一回一日發行)
 昭和十八年五月廿日印刷本・昭和十八年六月一日發行

淨土 第九卷 第六號

定價金十二錢(送料)
 郵費等金十三錢
 外地定價